

助けの神と現はれて

善惡邪正を立分ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

直日の御靈現はれて

惡を戒め善を賞め

貧しき人を富しつゝ

生活難に苦しめる

可憐の民を救ふなり

誤解と矛盾に充たされし

惡魔の世界を射照らして

松の神代に立直す

救の神は天にあり

惠の神は地にます

天と地との真中に

生い育ちたる民草は

何れも神の御子ぞかし

神は汝等の親なるぞ

我子の惱み苦みを

如何でか見すて玉ふべき

神には神のそなへあり

暫く待てよ神の子等

五六七の柱現はれて

光と榮と喜に

充てる社會を建設し

神人和合の瑞祥を

來し玉ふは目のあたり

心を研き身をきよめ

其日の境遇に甘んじて

天地の時を待てよかし

旭は照る共曇る共

月は盈つ共虧くる共

星は御空にきゆる共

山裂け海はあする共

假令地震強くして

大厦高樓忽ちに

地上に壞れ崩る共

惠の神は誠ある

可憐の御子を救ふべし

喜べ勇め四方の國

山野に生し立つ人草よ

神は汝と共にあり

勇んで時の至るをば

あ、惟神 々々

神の恵に如くはなし

三五教の宣傳使

瑞の御靈の大神の

宣べ傳へゆく神司

合點の行かぬ事あらば

深き教を聞けよかし

山野に生し立つ神の子よ

勇めよ勇め皆勇め

神に祈りて待てよかし

神にまされる力なし

我は此世を教へ行く

齋苑の館に現れまし、

聖き教を世に弘く

何れの人も世の中に

我目の前に集りて

我等は神の御使

神に代りて何事も

あ、惟神 々々

かく歌ひつ、年若き女宣傳使が店の前を通り過ぎた。甲乙丙丁戊等は宣傳使の後を追

つかけて、何處迄も追従いて行く。宣傳使は被面布をかぶり、蓑笠をつけ、手甲脚絆

草鞋の扮装にて金剛杖をつき乍ら、足拍子を取り、優しき聲にて、五人の男の追跡

するもの知らず進み行く。

向ふの方より馬に跨つて、やつて来たのは横小路の俠客愛州であつた。愛州は馬上

乍ら四ツ辻に立ち、聲高らかに歌ひ出した。

愛州「珍の都の人々よ

物質文明の世の中は

完全に委曲に諭すべし

御靈の恩頼を願ぎ奉る」

早く眼をさませかし

最早終となりにけり

これの御國は其昔

桃上彦の天降りまし

汝等の祖先を守りまし

いや永久に樹て玉ふ

四民平等博愛の

上下和合し官民は

世は安國と平らげく

近き御代より常世なる

蔓り來りて珍の國

醜の司の魂を

高天原に現はれし

惠の露を降らせつゝ

神人和樂の神國を

珍の御國ぞ神の國

聖き教を樹て玉ひ

一致の歩調を取り乍ら

治まりゆきし御代なれど

怪しき國の曲教

先づ第一に上に立つ

物質本位に惑溺し

優勝劣敗我よしの

衆生の痛苦は白河の

大厦高樓に安臥なし

受けつゝ知らぬ曲津神

上流濁れば下にこる

上流階級に壓倒され

影を隠せし今日は

吾等は神に祈りつゝ

背水會を組織して

衆生の權利を襲断し

教を頻りに吹込みて

夜舟と枕を高くして

尸位と素餐の譏をば

上のなす事下倣ふ

中間連中は悉く

國家の中堅悉く

如何にせん術なきまゝに

苦しむ衆生を救はむと

義侠を以て任じつゝ

私利を營む奴原の

鼻つばしをばねち折りて
 尚も自ら悟らずば
 珍の御國の御爲に
 衆生に代つて大掃除
 仁義に富める人達よ
 吾等が傘下に集りて
 参加し玉へよ時は今
 上と下とは逆轉し
 悪人益々世に榮む
 此現狀を見乍らも

モルヒネ注射を斷行し
 吾に正義の劍あり
 尊き命を犠牲とし
 敢行せんと思ふなり
 義侠に強き諸人よ
 震天動地の大業に
 天と地とは轉倒し
 善惡正邪を誤りて
 善人將に亡び行く
 吾身の安全計る爲

袖手傍觀する奴は
 体は畜生の畜物だ
 虚偽と猜疑と罪惡に
 仁慈と進歩と幸福に
 正義に及向ふ刃なし
 神の守のなからむや
 起つて醜類打倒せ
 忽ち汝等亡びなむ
 振へよ振へ今の時」

姿は人間なればとて
 早眼をさませく
 満ちたる舊衣を脱ぎ捨て、
 満てる新衣と着替へかし
 誠を辿る吾々に
 衆生よく奮起せよ
 汝等起つて倒さずば
 人間興亡の黄泉坂

と嗚鳴つて居る。女宣傳使は愛州の姿を被面布越に眺めて、何思つたか、コソくと

横道へ姿を隠して了つた。之は春乃姫が宣傳使と變装して、市中を宣傳に廻つてゐたのである。女宣傳使に従いて來た五人の男は、愛州の演説に氣を取られ、女宣傳使の行方を見失つたのも氣がつかかなかつた。愛州は馬の頭を立て直し、横小路の吾家の方面目がけ

愛州「神が表に現はれて

善惡邪正を立別ける

この御教は昔より

今に傳はりませせ

今迄神の現はれし

例を聞きし事はなし

物質界の現代を

救うて神の天國を

建設するは肉体の

神に等しき眞人の

力でなければ世の中は

決して立つては行かうまい

吾等はそれをば感じしゆ

ヒルの國をば後にして

これの都に進み入り

先づ第一に吾身をば

犠牲となして濟世の

模範を示し世の中の

眠れる僧侶や宣傳使

比丘や比丘尼の目をさまし

此世の泥をすゝがむと

覺悟をきはめ俠客の

身分となりて朝夕に

人類愛護の本旨をば

遂げんが爲に勵むなり

あ、惟神々々

神は萬物普遍なる

誠の靈にましくて

人は天地の經綸を

司るべき器なり

神人茲に合一し

無限絶對無始無終

太き力を發揮す

三五教の御教に

示させ玉ふを自ら

事實に現はしためさんと

思ひ立つたる俠客の

義侠にみちし愛州ぞ

如何なる妨害あることも

恐るな屈すなためらふな

神は汝と共にあり

神の守りし人の身は

如何なる曲も製はんや

いざ諸人よ振ひ立て

勇めよ勇め世の爲に

實も名譽も打すて、

來らんとする神の世の

犠牲となつて盡せよや

あゝ惟神々々

御靈幸ひませせよ」

と歌ひ乍ら己が館を指して、馬上豊に歸りゆく。道筋は人の山を築き、市中の人氣は

鼎の沸くが如くであつた。

(大正一三・一・二三、舊一二・二・一八、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第一章氣 轉 使 (一七五六)

都大路の中心赤切公園の真中に浮浪階級大演說會が始まつた。數多の取締は出入口を固め、角袖は聴衆一人に一人位な割合で數千人繰出し、物々しき警戒振を現はしてゐる。浮浪階級演說會の會長ブルドグは獅子の咆哮する如き聲にて、

「取締何者ぞ、法規何者ぞ」

と云はん許りの勢を以て、決死的大演說會を始めてゐる。

ブルドグ「諸君よくよつく聞け 世は常暗となつて來た

日月空に晃々 輝き亘れど如何にせむ

中空に村雲ふさがりて さも晃々と輝ける

光を包み隠しつ、 世は刈菰の涯てもなく

案れ行くこそうたてけれ かくも亂れし原因は

何處にあるかと尋ねれば 諸君もすでに御承知の

事とは思へど今茲に 一口火蓋をきり放つ

四民平等の神國を 壅塞したる曲神は

松若彦に伊佐彦を 先づ先頭に其外の

諸の司や持丸よ 彼等は地位と私慾をば

みたさん爲に衆生の 迷惑なきは夢にだも

辨へ知らぬ盲共 權威を笠に衆生の

汗や脂を絞りつ、 倉庫充たす憎らしさ

吾等衆生は飢に泣き

茅屋さへも無きまゝに

さも横暴な取締が

残らず吾等を牢獄に

與へゆくこそ憎らしき

又永久のものでない

水も温みて草木の

嬉しき春の來る如

恵の雨は降りぬべし

吹すさびたる荒野原

寒さに凍ね枕する

路傍に佇み眠りをれば

法規違反と吐きつゝ

投込み無限の恥辱をば

霜ふり雪つむ冬の夜も

必ず花咲き風薫り

百花千花咲き出づる

必ず吾等が身の上に

さはさり乍ら風の

越はずばいかで春の野の

いと麗しき温光に

深く根ざせる喬木の

月日の光を覆ひかくす

地上にすだく諸草は

神の光をかくされて

同じ地上に生ひ乍ら

一生つまらぬ者ぞかし

唯一の望みは天空を

枝葉を打ち切り棄つるより

振へよ起てよ諸人よ

浴することを得べけんや

幹をば拂へ枝を切れ

醜の喬木ある故に

恵の露を遮られ

いや永久に日蔭者

所を得ざる吾々は

此難關を切りぬける

封じて立てる喬木の

他に手段はなかるべし

いかなる壓迫來る共

十手の鞭の數多く

芒の如くに攻め來ども

命を的に放り出した

吾等はいかでか恐れんや

天の御聲を汝等に

傳達致すノルドフグ

語を替へ言へば救世主

吾言の葉を耳さらへ

完全に委曲に聞きおうせ

眠れる眼を醒ませよや

これ程曇つた世の中を

神や佛は何して

察する所神と云ひ

佛といふも道法衆の

一時の方便に過ぎなかる

俺等は最早神佛を

表にかざして臨む共

絶對的の無神論

神も佛も認めない

只我持てる腕力を

唯一の力とするのみぞ

勇めよ勇め諸人よ

吾言靈を諾ひて

此世を救ふ働きに

參加を望む人たちは

怯めず臆せず壇上に

登つて所信を吐露せよ

此世を此儘おいたなら

吾等世界の弱者等は

亡びゆくより道はない

すべて最後の解決は

運根鈍に限るぞよ」

と述べ立てる。取締は「中止解散を命ず」と大聲叱呼する。辯士は次から次へと取締の制止を聞かず登壇して各自に熱をふく。取締は引摺り落さうとする。忽ち數千の取締と數千の聴衆との間に大格闘を演じ、何者の悪戯か、彼方此方の町々より、黒煙濛々と立上り、チャン／＼と警鐘亂打の聲聞え來る。取締も群衆も狼狽の極に達し

右往左往に散亂して爲す所を知らなかつた。其處へ馬に跨つて、愛州、源州、平州、藤州は數多の部下を指揮し、消防隊を組織して、燃わ上る火災を殘らず消しとめ、喇叭を吹いて悠々として引あげて了つた。火事もすみ、騒動も稍おさまつた所へ、取締所のポンプが數多の取締に保護されてやつて來た。一旦逃げ散つた群衆は又もや赤切公園に集まり來り、再び演說會が開催された。辯士は代るく熱辯を揮ひ、伊佐彦の閣倒壞、持丸階級の討滅、清家階級を打破せよなど勝手な熱を吹き立てる。群衆は刻々其數を増し、ワイ／＼とよめき亘り、辯士の聲も遂に耳に入らなくなつて了つた取締も亦次第々々に其數を増し、十重二十重に取まいて、茲に第二の修羅場を演出した。今回の闘争は最も激烈を極め、阿鼻叫喚の聲四方に起り、殆ど戰場の如き景況を呈し、何時果つべしとも見當がつかなかつた。賢平も取締も武器を衆生に取られ進退

維れ谷まり、逃場を失ひ困つて居る。そこへ白馬に跨り、被面布を被り乍ら、聲も涼しく宣傳歌を歌つて出て來た女性がある。

「オレオン星座を立ち出で、
豊葦原の中津國

珍の都へ天降りたる
神の使の松代姫

此世を救ふ其爲に
白馬に跨り現はれて

衆生一同にさとしすなり
皆静まれよく

汝等一同皇神の
惠の露に包まれし

尊き誠の珍の子ぞ
兄弟垣に圍ぐとは

何たる心得違ひぞや
遙に天より此世界

聖き眼で見わたせば
上に立つ者下にある

民草ごちらも良くはない

名利物慾第一と

吾魂を省みず

こゝに現出したものぞ

静めて神の教を聞け

木花姫の御言もて

天國浄土に救はむと

松若彦を初めとし

全く時勢を顧みぬ

下萬衆の心根も

互に意地を立通し

思ひひがめて肝腎の

いと淺ましき修羅場を

何れも一同心をば

天教山に現れませる

珍の御國の衆生をば

今や現はれ來りけり

伊佐彦司の政策は

無謀至極の行方ぞ

神をば忘れ肝腎の

吾魂の所在をば

人は神の子、神の宮

神の御心畏みて

其肉体を有ち乍ら

人たる者の所作でない

但しは入岐の大蛇奴か

天地にさらせし淺ましき

上と下との隔なく

心を協せ力をば

神の鳴ひし靈國を

忘却したる酬ひぞや

天津國より精靈が

此世の人と生れ來る

此有様は何事ぞ

虎狼か熊猪か

譬がたなき醜体を

悔い改めよ諸人よ

貴き賤き別ちなく

一つになして珍の國

堅磐常磐に守れかし

いざ／＼さらばいざさらば 我は之より入重雲を

かきわけ天に昇り行く 萬一神の言の葉に

反く衆生のありとせば 神罰忽ち下るべし

あゝ、惟神々々 皇大神の御心を

茲に傳達なし了る」

と云ひ乍ら、馬に鞭ち淺原山の山頂目がけて雲を霞と嘯り行く。今現はれた松代姫と稱する女武者は其實松若姫の娘常磐姫であつた。常磐姫は春乃姫と謀し合せ、奇智を弄して天使と化け込み、一時の擾亂を平定せしめんが爲に現はれたのである。

賢平も取締も群衆も酒僞者も、神を信ずる者も信じ無い者も、麗しき美人の出現に膽を潰し、猛り切つたる勢を削がれ、争闘の手を止めて、只茫然と淺原山を指し

て逃げ行く怪しき女の姿を見送つて居た。

斯かる所へ簀笥草鞋脚絆の扮装にて、被面布を被り乍ら、聲も涼しく宣傳歌を歌ひつゝ、進み來る女がある。

「神が表に現はれて 三千世界を引ならす

すべて此世は天地の 神の造りし樂園ぞ

此地に生ふる人艸は 貴き卑きの隔てなく

互に睦び親しみて 神の賜ひし實をば

互に別ち萬遍なく 分配すべき御律ぞや

一方に高く實をば 積み重ねれば一方は

必ず缺けて低くなり 一方に樂む者あらば

一方に苦む者出来る
今や天運循り來て

之では平和と云はれない
高砂城の奥深く

救ひの神は現はれぬ

吾は春乃の姫なるぞ

この衆生の難儀をば

救ひやらんと朝夕に

凡ての寶を打捨て、

模範を示し蓑笠を

身に纏ひつ、町々を

巡りて誠を諭せ共

清家階級持丸は

慾にからまれ目はさめず

耳は塞ぎて衆生の

此號泣の悲鳴さへ

分らぬ迄になり果てぬ

あゝ惟神 々々

モウ此上は神様の

御手にすがりて黎明の

世を開くより道はない

目ざめよく上下の

各階級の人々よ

天津國より皇神の

御言を畏み下り來て

國依別の御子となり

今迄城中に育ちしが

いよ／＼天の時來り

神の柱と現はれて

汝等衆生に説き教ゆ

あゝ惟神 々々

神の言葉に二言なし

悔改めよ戒めよ」

と云つたとき、煙の如く何處にも無く姿を隠した。群衆は異口同音に春乃姫と聞いて感歎の言葉を絶た無かつた。負傷した役人も衆生も一言の叱言も云はず各家路に歸り行く。果して今後は春乃姫の出現に依りて衆生の心が鎮靜し、取締と衆生との争闘

の根が断たれるであらうか。

(大正一三・一・二二三、舊一二・二・二一八、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第二二章 悪原眠衆 (二七五七)

松若彦は吾爺の奥の間に捨子姫と共に、七むつかしい面をさらしてブツ／＼小言を云ひ乍ら、愚痴つて居る。

松若「コレ捨子姫、お前の教育があまり放縱だから忤の松依別は日日毎日變装して、悪原遊廓へ通ふなり、妹の常磐姫はお轉婆になり、姫様の御用だとか云つて、家を外なる此頃の行狀、之では清家の權威も保たれまい。チトしつかりして呉れぬと困るぢやないか。俺は政務が忙しいので子供の教育なきにはかゝつて居られない。子供の悪化するのは皆母親の教育が悪いからだ」

捨子「仰迄もなく、妾は充分の教育を施して居りますが、別に清家の忤、娘として耻し

い様な育て方はして無いと考へて居ります」

松若彦は聲を尖らし、

松若「悪原遊廓へ夜なく通ふ様な育て方をしておいて、それでも其方は良いと申すのか。非常識にも程があるぞよ」

捨子「忰も年頃の身分、最早妻帯をさせねばならぬ年頃でムいますのに、貴方が何時も家庭が何うだの、資格が何うだのと、古めかしい事を仰有りますので、忰も失戀の結果自棄氣味になつてるのでムいます。忰の愛してる女は、貴方も御存じの饅頭屋の娘お福と云ふ者、其福の神を貴方は地位が釣合はぬと云つて、家來を廻し壓迫的に縁をお切りになつたぢやありませんか。それ故忰は失戀の結果、如何なる事を仕出かすかと、心配で夜の目も寝られ無かつたのでムいます。世間にある慣ひ、失

戀の結果淵川へ身を投げて無理心中をしたり、鐵道往生、或は鐵砲腹、首吊りなど失戀者の最後は色々あります。それ故忰は如何するであらうかと心配致し三五の大神様に祈願をして居ました所、忰も神直日大直日に見直し聞直しが出来たと見えていきりぬきに悪原遊廓に通ふ様になつたのでせう。失戀者の行くべき結果としては最善の方法を選んだものだと感心を致して居ります」

松若「コレ捨子、イヤ婆ア殿、お前そんなこと正氣で云つてるのか。家名を毀損する忰手討に致しても飽き足らぬ奴、それに其方は賛成と見ゆるな、怪しからぬぢやないか。吾家は正鹿山津見様の御時代より珍一國の代理權を任せられ、權門勢家として今日迄傳はつて来た立派な家筋だ。其家筋に汚點を印する者ならば、何程大切な忰でも許すことは出来ないではないか」

捨子 「それは數十年前の道德律でムいませう。道德も政治も宗教も人情風俗も日進月歩の世の中、そういふカビの生れた思想は、今日では通用致しますまい。貴方は一國の宰相であり乍ら、そういふ古い頭で、良く衆生が納得する事だ、何時も不思議がつて居るのでムいますワ。幸に忤なり娘が時代相應の魂に生れてくれたので、まだしもそれを老後の樂みと致しまして、不平でならぬ月日を送つて居ります」

「何と思つたか、捨子姫も今日は捨鉢氣味となつて、怯めず臆せずやつて退けた。松若彦は數十年添うて來た柔順な女房が、こんな思ひ切つた事を云はうとは夢にも知らず、始めての事なので、若や狂氣したのではあるまいかと案じ出し、先づ何よりも逆らはぬが第一だ。先づ少し許り熱の冷める迄、彼の云ふ様にしてやらうかと心を定め猫撫で聲を出して、背を撫で乍ら、

松若 「コレ捨子姫殿、お前の云ふ通りだ。テモ扱も明敏な頭腦だな。お前はチト激して居る様だから、今日はモウ何も云はない。ゆつくりと奥へ行つて靜かに休んだが良からう」

捨子姫は松若彦の心を早くも讀んで了つた。自分を逆上して居ると信じて居るのを幸ひ、日頃鬱積して居る自分の意見を全部此所で喋り立て、松若彦の決心を促さんと覺悟をきはめ、ワザと空とほけて、

捨子 「ホ、、、あのマア御前様のむつかしいお顔わいの。妾は之から、淵川へ身を投げて永のお別れを致しますから、さうぞ暇を下さいます。暇をやらんと仰有つても、妾が覺悟を定めた以上は舌を嚙んでも死んで見せませう。マア死にたいワ、ホ、、、。靈因脱離の境を越ね、一刻も早く天國に上り、清く樂しく第二の生活に入り度

うムいます。アレ、エンゼル様が、黄金の扇を披いて妾に來れ、と招いて居らつしやる。あ、早く行き度いものだなア」

松若彦は益々驚いて、……あ、此奴ア丸氣違だ。仕方が無い、先づ機嫌を損じ無い様にせなくちやなるまい……と

松若「アイヤ捨子姫殿、其方の云ふ通り、此松若彦はぎんな事でも聞いて上げるから、天國なんか行かぬやうにして呉れ。年が老つてから女房に先立たれちや、淋しいかなア」

捨子「妾の云ふ事を、ハイ、と云つて、一言も反かす聞いて下さいますか」

松若「ウン、何でも聞いてやらう。遠慮なしに云つて見たが良からう」

捨子「そんなら申上げます。先づ第一に大老職を返上し、ごうぞ妾と一緒に民間に下つ

て、衆生の怨府を連れて下さいます。そして衆生に政權をお渡し下さいますれば、

衆生はキツト國司家を中心として立派な政治が行はれるでムいませう」

松若彦は迷惑の体で面を皺めたが、……エー併し乍ら逆らうて發動されちや堪らない。何でもい、氣違ひの云ふ事だから、ウン、と云ふて置けば良い……とズルイ考へを起し、

松若「ウン、ヨシ、何時でも返上する積りだ」

捨子「あ、嬉しい事、流石は松若彦様、それでこそ妾の夫でムいますワ。ごうぞ御意の變らぬ内、大老職の辭表を認め、實印を捺して下さいませ。そうでなければ、妾は死んで天國へ參ります」

松若「チ、困つた氣違ひだなア。先書いてやらねば治まらない。書いた所でお出さなけれ

ば良いのだ」

と文机から料紙を取出し墨をすつて筆に墨し、大老の辭表をスラ／＼書き認め、捨子姫の前で實印を押捺し、

松若 「サア捨子姫、之で得心だらうなア」

捨子 「ハイ得心でムいます。さうぞ其辭表を、妾に御渡し下さいませ」

松若 「イヤ／＼斯うしておけば何時でも出せるのだ。若しお前に持たしておいて、そこからへ落とされては大變だから、先づ渡すこと丈は止めておかう」

捨子 「それでは貴方は妾を許つて居らつしやるのでせう。政權や顯職に戀々として、居らつしやるのでせうがな」

松若彦は癪にさへて、

松若 「エ、入釜しい、きまつた事だ。今日の地位は決して此松若彦が得たのでない。言はゞ祖先の名代も同じ事だ。輕々しく俺一了見では左様な事が出来るものか。御先祖様を地下から呼び起し、お許しを受けずばなるまい。其方には入岐の大蛇が魅入つて居るのであらう。汚ららしい、そちらへ行けッ」

と燒囊になつて嘔鳴りつけた。捨子姫は……老人を餘り腹立てさすのも氣の毒だ、こゝらで幕の切所だ……と從順に沈黙に入つて了つた。松若彦は杖をつき乍ら、憂さ晴らしの爲庭先の花を見んきて、二足三足外へ出た所へ家僕の新公が慌しく歸り來り、

新公 「御前様へ申し上げます」

松若彦は驚いて、

松若 「ヤ、お前は新ぢやないか。其慌てた様子は何事ぞ。又プロ運動でもおつ始まつた

のか」

此親爺、プロ運動が氣に懸かると見えて、二つ目にはプロ運動が突發したのではないかと訪ねるのが此頃の習慣となつて居た。

新公「仰の如く、たつた今、赤切公園に於て、プロ階級演説會が始まり、大變な取締り衆生との衝突で、血まぶれ騒ぎが勃發致しました」

松若「ナアニ、プロ階級演説會？、そして血まぶれ騒ぎ、其後は何うなつた」

と云ひ乍ら、驚いて庭の敷石の上にドスンと尻餅をつき……「アイタタッタ」と面盤めて居る。

新公「お蔭で、其騒も鎮靜致しましたが、不思議な事には、エンゼルだ云つて、白馬に跨り、妙齡の美人が現はれ……松若彦も悪いが、衆生も悪い……テな事を歌ひ

ましたら、不思議な者でけすな、ビタリと争闘が止まりました。然しながら其エンゼルの顔が當家のお嬢様にソックリでした。お乗り遊ばした馬も、お邸のに寸分違はぬ白馬でムります。若しも、お嬢様も宅に居られず白馬も居ないとすれば、テッキリ常磐姫様に間違ひムいますまい」

松若「今朝から姫も居らず、馬もゐないから、あのお轉運娘ごつかの公園に散歩に行つたと思つてゐたが、プロ運動に加はり居つたか。そして衆生の前に松若彦が悪いなど云へば、火の中へ薪に油をかけて飛込む様なものだ。益々プロ運動を熾烈ならしめ、國家の基礎を危くする事になる。新公、若しも姫が歸つて來ても松若彦が許さぬ限り、一步も入れてはならぬぞ。あーあ、子が無くて心配する親は無いが、子の爲に親は心配せねばならぬか」

新公「御前様、子がある爲に御心配になりますか。そうすればお金の爲、爵位の爲には一入御心配でございませうな」

松若「爵位がある爲、黄金がある爲の心配は心配にはならぬ。此老体もそれある爲に息をして居るのだ。アッハ、ハ、」

と冷やかに笑ひ乍ら、杖を力にエチ／＼と奥の間さして進み入る。

新公は籌を手にし乍ら、獨り呟いて居る。

新公「よい年をして執着心の深い老爺爺だな。國司様から貰つたお菓子も葡萄酒も、又澤山な政治家連や出入の者や乾兒共から病氣見舞だ云つて持つて来るサイダーにビール、林檎や菓子、一つも自分も喰はず人にも能う呉れやがらず、皆金にして郵便局に預け、金のたまるのを唯一の樂みとして居る慾惚け爺だから、サッパリ駄目

だワイ。俺達にビールの一本も振舞つてよかりそうなものなのに、毎日日車力に積んで賣りにやりあがる。本當に吝な爺だ。それだから良うしたものだ、親辛勞子樂、孫乞食と云つて、三代目になれば、此財産もスッカリ飛んで了ふのは今から見えて居る。松依別さんの此頃の悪原逆ひと云つたら、本當に痛快だ。印形を盗み出しては銀行から金を出し、金銭を湯水の如くに使ひ、大盡遊びをやつて居らつしやるのに、慾に目が眩んで、何も知らずに居るとは可愛相なもんだな。金を拵へて番する身魂と、金を使ふ身魂とがあるを見ゆるワイ。アッハ、ハ、」

と獨り笑つて居る。其處へ馬に跨つて、悠々と歸つて來たのは盛装を凝らした常磐姫であつた。

新公「ヤ、お嬢さん、お歸りなさいませ。貴女はオレオン星座からお降りになつた、エ

ンゼルの松代姫さんちやムりませぬかな」

常磐「ホ、、、新さん、お前見て居たのから」

新公「へーく、貴女のお芝居は此新公、目敏くも看破して居りましたが、然しながら衆生があれ丈不思議がつて居るのに、素破抜いちや面白くないと思つて、黙つて歸つて来ました。そして御前様に一寸話しました所、大變な御立腹で、……清家の娘がブ口運動の煽動をする様なことでは、此内へは入れられぬ、門前拂を喰はせ……それはく〜わらい勢でムいましたよ。マア一寸此門潜るのは見合はして頂きます。御前様の代理權を持つて居りますから斷じて入れませぬ」

常磐「ホ、、、大分面白うなつて来たね。そうすると父上は今日限り、お暇を下さるのだらうか。そうなれば、妾も願望成就だワ。そんなら、父上に、之つきり、お目

にか、りませぬ〜ら、……随分御身を大切になさいます……と云つたと傳へて呉れ左様なら」

と駒の頭を立直し、出行かんとするを、新公は驚いて、

新公「あ、若しく〜お嬢様、少時お待ち下さいませ。何程殿しく仰有つても、子の可愛ゆう無い親はムいませぬ。貴女が御改心下さらば、キツトお許し下さいますから御前様に伺つて来る迄、マアく〜一寸御待ち下さいませ」

常磐「オイ新さん、折角解放された妾を、再び苦める様なことはして下さるな。父上の其傳言を聞く上は、妾も世界晴のしたやうな心持がして来た……左様なら、父上母上に宜しう云つてお呉れ」

と言ひ残し手綱かいくり、館の門前の階段を、「ハイ〜」と馬をいませしめ乍ら降つ

て行く。其處へツブ六に酔ふて、兄の松依別が懷手をし乍ら、三尺帯を尻のあたりに締め、自墮落な風をして、頬冠りを七分三分に被り、

松依別「失戀したとて短氣を出すな

悪原廓に花が咲く……………ぞ。

日々毎日悪原通ひ

早く親爺に死んで欲しい……………い。

家の親爺は雪隠のそばの柿よ

濫うて汚うて細くてくはれない……………い」

と千鳥足になつて、階段を昇つて來ると、妹の馬とベタリ出會し、

松依「こんな狭い所を馬に乗りやがつて、ド、何奴だ。見た所、一寸濫皮の剣けたナ

イスと見ゆるが、一寸馬から下りて來い。握手の一つもやつてやらア。エー、ゲー
アプー、エー苦しいく。なんほ苦しいても美人の顔見りや氣分が悪くないもんだ」

常磐姫馬上より、

常磐「あ、見つともない、兄さんちやムいませぬか。妾は常磐姫でムいますよ」

松依「時は今、親爺の亡ぶ間際哉……………何か何にか仰有いましてね……………あ、面白いく、これから歸んで、藥鐘頭のお小言を頂戴するのかな」

常磐「コレ兄さん、しつかりなさいませ。妹でムいますよ」

松依「妹でも何でも構ふものか……………妹と背の中を隔つる吉野川……………(唄) 悪原通でいきりぬく」

常磐姫は止むを得ず、馬からヒラリと飛び下り松依別の背を叩き乍ら、

常磐「兄さん、しつかりして下さいませ。妾は之から父の怒に觸れ、家出を致します。

貴方はさうぞ両親に心を直して、良く仕へて下さいませ。之が此世の別れにならうも知れませぬから……」

と流石氣丈の常磐姫も、涙に濕つた聲を絞つて居る。松依別は始めて妹と悟り、俄に氣がついた様に、

松依「ヤア妹か、一体何處へ行くのだ」

常磐「ハイ父に勘當されましたので、之から誰憚らず、プロ運動にでも出かける積りでムいますワ」

松依「ナアニ、プロ運動？、結構々々、それも結構だが、悪原通ひも結構だらう。親爺

の奴衆生の膏血を絞り、澤山の金を蓄て置きやがつたものだから、死ぬにも死ねず行く所へも行けず苦んで居るから、チツと其金を浪費し、深い罪をチットでも輕うしてやらうと思つて、今頻りに孝行運動の最中だ。お前も之からプロ運動をやり、親爺の内閣を倒し、チツと罪を取つてやれ。お前も之から親孝行を勵むがよいぞ、左様なら……」

と又もや門をくゞり、

松依別「兄は悪原妹の奴は

プロ運動で孝行する……」

新公は箒を持った儘、庭園の隅つこから走つて来て、

新公「若様、御前様が大變な御立腹でムいます。さうぞ着物を着替へて、お這入り下さ

いませぬと、其ザマでお遁入りになつては、大な雷が落ちます。するに吾々迄が迷惑致しますから、チッと低い聲でものを仰有つて下さいませ」

松依

「エッへ、、、面白いな、胸かスイとする様な雷に一遍落ちて貰ひたいものだ

……地震 雷 火事親爺、親爺が恐くて大神樂が見られん……と、アア碌でも無い酒を無茶苦茶に、お里の女奴強ひるもんだから、内へ歸つても未だ酒の氣が残つてけつかる……あ然し愉快だ、……オイ親爺、妹を放り出して、どうする積りだ妹を放り出すのなら、何故兄から放り出さんのぢやい。よう放り出さんのか、俺の方から放り出てやらうか」

とダミ聲を振上げて嘔鳴つて居る。松若彦は何だか妙な聲が屋外に聞ゆるので、杖をついて現はれ來り、窓からソッと覗いて、松依別の姿に肝を潰し、「アッ」と云つた儘其場に倒れ、した、か腰を打つて、ウン／＼と唸つて居る。館の中は上を下への大騒動、水よ薬よ醫者よと、家令や家扶家従の面々が自動車や自用俵を飛ばして大活動を始め出した。松依別は懷手をし乍ら、ブラリ／＼と又もや門口指して出て行く。

(大正一三・一・二三、舊一二・二・一八、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

愛國の至情

三三三

第三篇 神柱國礎

第一三章 國

別 (一七五八)

國照別

「われは淋しき冬の月

御空に高く打ふるひ

中空遮る雲の戸の

開くよしなき悲しさに

苦み悶ゆる折もあれ

忽ち吹き來る時津風

十重に二十重に包みたる

雲吹き拂ひ漸くに

地上に降る道開く

草の片葉におく霜の

冷たき宿を借り乍ら

都を後に下りゆく

我身の上ぞ頼もしき

遙に地上を見渡せば

虎狼や獅子熊の

伊猛り狂ふ荒野原

國 別

二三三

正しき人は醜神の

脚ににじられ踏まれつ、

悲鳴をあけて泣き叫ぶ

曲れる人は揚々ど

春野に蝶の舞ふ如く

地上の惱みを他所にして

歌舞音楽にひたりゐる

實にも矛盾の天地かな

いよく神が現はれて

三千世界を引ならし

草の片葉に至る迄

恵の露にしたしつ、

救はむ時ぞ近づきぬ

あ、惟神 々々

我れは國照別司

此曇りたる國土を

三五の月の御教に

照し清めて永久に

國照別の御世ぞなし

草木もめぐむ春乃姫

月と花との兄妹が

神の賜ひし珍の國

昔の神代に引戻し

憂に惱める人草を

救ひ助けむ吾願ひ

達せん爲の鹿島立

守らせ給へ惟神

神の御前に願ぎまつる

吹き來る風は荒くとも

降り込む雨は強く共

假令地揺り雷の

頭上に轟く世あり共

いかでか恐れん鹿島の

聖き國照別の魂

如何なる權威も物慾も

左右し得べき力なし

珍の御國は云ふも更

高砂島に國と云ふ

國のことごとく三五の

神の教さねち直し

生ける眞の神として

降り行くこそ勇ましき

あ、惟神々々

御靈の恩頼を願ぎ奉る」

と歌ひ乍ら、アリナ山の峠の頂上に着いた。國照別は東方の原野を遙に見おろし乍ら國照「あ、珍の國も暫くこれで見るこゝが出来ないだらう。其代り今度歸つて来た時は此廣大なる荒野ヶ原も金銀瑪瑙、瑠璃輝礫、玻璃なきの七寶に飾られた地上天國に一變するだらう。雲深き城中を後に親兄弟家來を見すて、鄙に下り、今又吾城下にも住む事を得ず、心からは云ひ乍ら、生れ故郷を立去るは、さこそもなく心淋しいやうだ。あ、否々、そんな氣の弱いことで、此神業が勤まらうか。珍の國の國司は元は三五の教を以て人草を教化するのが天職であつた。餘り政治なきに心を用ひなくとも自然に治まつてゐたのだ。然し乍ら今日となつては國外よりいろ／＼の

主義や思想や無用の學術が流れ込んで来て、古の如き簡易な信仰のみを以て國を治むる事は出来なくなつて了つた。然し乍らさうしても世の中は知識や學問の力では治まるものでない。先づ政の第一は徳を以てするより外にない。自分は其徳を養はんが爲に、城中をぬけ出し、最も卑しき車夫の仲間に入り、下層社會の事情を探り、今又俠客となつて、市井の巷に出没し、吾靈魂をして金剛不壞の如意寶珠たらしめんと、焦れど藻掻けど如何にせん、永い間嬢や坊にて育てられ、少しの荒き風にさへも惱まされるやうな弱い身体で、さうして衆生を安堵せしむることが出来るやうか。何と云つても自分は珍の國の世子、清家生活も顯要の地位も少しも望まぬけれど、此先自分が此國に居らなくなつたならば、信仰の中心、尊敬の的、思想の眞柱を失ふとも同然、容易に、如何なる賢者が現はれても、徳望者が現はれても、

治むることは難かしいだらう。それを思へば、一時も早く魂を研ぎ、眞の神徳を身にうけて、再び此國に歸つて來なくてはならうまい。珍の國の廣き原野が今吾視線を離れるに望んで、何となく、山河草木を始め吾國衆生が戀しくなつて來た。然し乍ら一旦決心した吾魂を翻すことは出來ぬ。あ、惟神 靈幸倍坐世。國治立大神様、何卒國照別が赤心を御受納下さいまして、珍の國は申すも更なり、高砂島の天地をして昔の神代の歡樂郷にねぢ直させて下さいませ。又兩親を始め妹の春乃姫其他城中の老臣、及び友人の身の上に特別の御恩寵を垂れさせ給ひて、珍の國家を平安に隆昌に進ませ給ふ様偏に御願申上ます。珍の國に別る、に臨んで、國魂神様の御前に謹んで御禮を申し上げます。あ、惟神 靈幸倍坐世」

と感慨無量の態で、太息をついてゐる。淺公は珍の原野を見おろし乍ら、

淺「親分さん、何とマア珍の國も廣いものですなア、そして何だか珍の國の山河草木が……淺公行くなく元へ返らせ……と手招きするやうな氣分が致しまして、之から先へ行くのが、何だかおつ、うなやうな、嬉しくない様な氣になりました。今親方の様子を見てゐると二つの目から涙がポロリ〜と落ちてゐましたよ。何程俠客の親分でも、人情に變りはないとみえますな」

國照「ウン、生れた國といふものは、何とはなしに戀しいものだ。言はゞ自分等を永らく育て、くれた眞の母だからな。幼子が母の懷をはなれて、異郷の空に出るのだもの、俺だつて、チットは感慨無量の涙にくれるのは當然だ。涙のない人間は鬼だ。俺も先づ鬼の境遇だけは免れたとみわるワイ。アッハ、、、」

と俄に笑ひに紛らす。淺公も泣き聲交りに「アッハ、、、」と附合笑ひをする。

國照「淺公、之から先はつまりいへば、他國だ。神様の方からいへば、皆神の國で境界もなければ差別もないが、地上の人間共が、之迄は珍の國、之から先はテルの國だとか、カルの國だとかヒルだとかハルだとか、勝手に境界をつけ、互に權勢を争うてるのだから、其考へでゐないよ、大變な失敗をするよ。自分の國內では俠客も羽振が利くが、様子も分らぬ他國では、そつういふ譯にはゆかんからのう」

淺「所で吠ぬ犬はないとかいひましてな」

國照「オイ淺、犬に喻るとは殺生ぢやないか、ハ、ハ、ハ。サア、を降つて、懸橋御殿といふのがあるそうだから、それへ參拜をして一夜の宿を借り、ゆつくり行くことにせう」

淺「ハイ、お伴致しませう、あーあ、之で故郷の空の暫く見納めかなア……………」

去りかねて振り返り見ぬ珍の國

妻さへ子さへなき身なれ共。

何となく戀しくなりぬ珍の空

今別れんとして涙こぼる、

國照別「汝も亦人の御子なれ世のあはれ

よくも悟れり深く覺れり。

足乳根の親のまします珍の空

打ち仰ぎつゝ、別れ行く哉。

國愛別親しき友は如何にして

吾ゆく後に活動やせむ。

吾友よ暫く待てよ國照別

神と現はれ歸り來る迄。

吾行くは御國をすつる爲ならず

眞の神の國にせむ爲。

吾ゆくは親を苦むる爲ならず

大御心を慰めむ爲。

吾ゆくは國民すつる爲ならず

天國淨土に救はむが爲」

と歌ひ了り、金剛杖を力に急阪を下りゆく。

國照別「神の恵のアリナ山

杖を力に下りゆく

旭は照る共曇ることも

假令大地は沈むことも

神に任せし吾身魂

盡す吾身に幸あれど

故國の空を後にして

登りつ下りつ進み行く

守らせ給へ惟神

此世を造り給ひたる

世人を教へ諭しゆく

此世の塵を打拂ふ

月は盈つ共虧くる共

誠一つの三五の

神と國とに眞心を

朝夕祈る勇ましき

踏みもならはぬ山阪を

國魂神の龍世姫

謹み敬まひ願ぎ奉る

國治立大御神

瑞の御靈の大御神

科戸の風や雨となり

雪ごもなりて守ります

貴の力を頼りとし

天にも地にも掛替の

なき垂乳根や妹を

後に見すて、出でてゆく

涙の雨は袖に降り

眼はかすむ今日の空

恵ませ給へ惟神

神かけ念じ奉る

と歌ひつゝ、國照別は先に立ち、淺公は杖を力に足拍子を取り乍ら、九十九曲りの石だらけの道を後に従ひ行く。

淺公

「ウントコドッコイ、アリナ山嶺に聞いたきつい阪

いよく戀しい珍の國

涙ご共に立わかれ

ウントコドッコイ危ないぞ

石のゴラクする阪だ

親方用心なさいませ

一時も早く此阪を

無事に下つてウントコシ

懸橋御殿にまる詣で

足の疲れを休ませり

鏡の池とて名の高い

昔の神の靈跡が

今に残つてゐるといふ

名所を見るのも今少時

あゝ惟神 々々

何卒無事に此阪を

親方さんと諸共に

下らせ給へ惟神

御靈の恩頼を願ぎまつる

旭もテルの國野原

向つておりゆく二人連れ

若しも國人吾姿

眺めて空から天人が

降つて來たかと怪しんで

いと珍らしき穀物

入足の机におき並べ

迎へてくれ、ば嬉しいが

ウントコドッコイ、アイタッタ

メッタに左様なうまい事

あらうと思はぬボンの糞

雨露凌がしてドッコイシヨ

くれてもそれで満足だ

もうし、親分よ

俄に霧が深くなり

一間先は霧の海

だん／＼淋しうなつてくる

一足々々阪路を

降る度毎根の國や

底の國へミ行く様な

淋しい気分になつて来た

あ、惟神々々

神様宜しく頼みます

後へは返さぬ男伊達

假令命はすつるとも

思ひ立つたる親分の

氣象はいつかな怯むまい

俺も此處迄お伴して

卑怯未練に引返す

譯にはゆかぬ男の意氣地

斯うなりやホンに俠客も

ウントコドッコイ辛いもの

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

霧は山路を包むとも

大蛇の奴が行先に

道を塞いで攻め来とも

弱きを扶け強きをば

挫いて通る男伊達

それを兼たる宣傳使

國照別の珍の御子

御伴に仕へた淺州は

決して／＼ひるまない

あ、勇ましやく

一足々々ウントコシヨ

勝利の都へ進み行く

神は吾等と共にあり

親分も吾等と共にあり

吾等を守るは神にまし

吾等を守るは親分だ

又親分の身の上を

守る眞の神様は

國治立大御神

次に乾兒の淺州は

朝から晩迄テク〜と

御後に従ひ進み行く

心こそ當とも白雲の

山路を別る旅の空

實に面白し勇まし、

あ、惟神々々

御靈幸はひましませよ

ウントコドフコイ〜シヨ

ドッコイ〜〜シヨ

いちぎれ〜に山降りやまくだの歌を唄うたひ乍なら、漸おだくにして稍平坦やまへいたんな緩勾配ゆるこうはいの阪道さかみちに着ついた。

霧きりは益々深ふかくして咫尺しせふを辨わぜず、太陽たいやうは西天せいてんにかくれしと見みえ、暗やみの帳とばりはチク〜と二人ふたりを包つんで來きた。二人ふたりはやむを得えず、此處ここに一夜いっやを明あすこと、なつた。あ、惟神かんたか靈幸たまさち倍坐はさま世せ。

(大正一三・一・二四、舊一・二・二・一九、伊豫於山口氏邸、松村眞澄録)

第一四章 暗

枕 (一七五九)

國照別主従はアリナ山の中腹に止むを得ず一夜を明す事となつた。咫尺を辨ぜざる濃霧は陰々として身に逼り來るかと思れば、忽ち空は黒雲漲り、夕立の雨が礫の如く二人の衣を打ち、吹き飛ばすやうな風がやつて來る。深霧、靄、大雨、大風と交るく走馬燈の様に迫つて來る其淋しさ苦しさに、流石の國照別も初めて知つた旅の惱み、心の底より天地に拜跪して一時も早く黎明の光を仰がん事を祈願した。されども時の力は何程祈願しても左右することは出來ず、夜は森々として更ゆく計り、四邊は益々暗く互の所在さへ目に入らなくなつて了つた。

國照別「雨風にさらされ霧につままれて

行手に迷ふ吾身魂かな」

淺公「氣の弱い親分さんのお言葉よ

いつ迄暗の續くものかは」

國照別「淺公の生言靈をめで給ひ

朝日の御空惠ませ給はん。

淺茅生の野邊を渡りて今こゝに

誠アリナの峰に休らふ。

夜の雨峰の嵐におびわつ、

ふるひるるかも木々の梢は」

淺公「主従がふるひるるかと思ひしに

木々の梢で先づは安心。

親分が慄ふ様では曲神の

すさぶ世の中渡るすべなし」

國照別「ふるふといふ吾言靈は世の中の

あらゆる塵をふるふ謎なり」

淺 公「負ぬ氣の強い國照別さんよ

氣をつけ給へ漆の木蔭を。

右左前も後も見わかね

暗の山路はいと静けき」

國照別「淺公よ静かなりとは嘘だらう

心の底の淋しさ語る」

兩人は何さなく寂寥の氣に打たれ、膝をすり合して阿呆口を駄句つてゐる。いこいこもなしに細い淋しい糸の様な聲が聞えて來た。淺公は國照別の腰に喰ひつき、ビリくく慄うてゐる。

淺「オ、親分さん、デ、出ましたぞ」

國照「ウーン、出たの」

淺「何うしませう」

國照「何うでも可いワ、惟神に任すのだな。屹度神の試練だよ。お前のやうな臆病者を伴れてゆくと、俺の手足纏ひになると思つてアリナ山の魔神が氣を利かし、お前を片付けてやらうと思つて、出現したのかも知れないよ、アッハ、ハ、テモ扱も暗い

事だワイ。若し汝と間違へられて、俺が頭からガブリとやられちや大變だから、オイ淺、二三尺間隔をおいて喋らうでないか。之丈暗くては化物だつて、目が見え相な道理がない。聲さへ出しておればそれを標的にかぶるだらうから、フッフ、」

淺「親分さん、貴方は随分水臭い事を云ひますぬ。乾兒の難儀を助けて下さるのが親分ぢやムいませぬか。自分が助かる爲に乾兒を魔神に喰はさうとなさるのですか」

國照「勿論だよ、お前は俺の乾兒になる時、何と云つて誓つた……親分さんの御身に一大事があれば、命をすて、盡します。命は親分に奉けました……と云つて、小指迄切つて渡したでないか、御苦勞だなア、ハッハ、、持つべき者は乾兒なりけりだ若しも汝がゐなかつたなれば、身代りがない爲 俺が喰はれて了ふのだ。淺公のお蔭で俺も命が全ふ出来るワイ。南無淺公大明神、殺され給へ、喰はれ給へ、叶はん

から變幸はへませ、エッハ、、、」

淺「ソ、それは、チ、チッと違ひませう。親分が喧嘩の時とか、又強きを挫き弱きを扶け遊ばす時に、お伴にいつて命をすてるのなら、捨甲斐もあります、こんな淋しい山の奥で、エタイの分らぬ化物に喰殺されちや本當に犬死ですからなア」

國照「そりや汝のいふ通り、全くの犬死だ。椽の下の舞だ。然し乍らそれを犠牲といふのだ。親分がまさかの時に犠牲にする爲、汝を乾兒にしておいたのだ。俺だつて、たつた一人の乾兒を魔神に喰はしたくはないが、それでも自分の命をすてるよりは辛抱がしよいからのう、ホッホ、、、」

最前の怪しい口笛を吹くやうな聲は細い帯の様に地上七八尺の上の方に線を劃して聞わてゐる。

「ヒュー〜、ヒュー〜」

實際は梢を疾風の渡る音であつた。されど淺公の身には妖怪より聞えなかつた。國照別は始めから風の聲だといふ事は承知してゐたが、餘り淺公が驚くので、面白半分に揶揄つてみたのである。

淺公は慄ひ聲を出して、

淺「國治立大神様、瑞の御靈大神様、何卒々々只今現はれました怪しき神を追ひかけて下さいませ。親分も大切なら、私の體も大切でムいます。親分の代りに私が喰はれますのは少しも厭はんことは……ムいませぬが、同じことなら、親分乾兒共にお助け下さいませ。今私がこゝで喰はれましては、親分さんも知らぬ他國で一人旅御苦勞御艱難をなさるのがお氣の毒でムいます。私だつてこんな所で死にたくはム

いませぬ、惟神 靈幸倍坐世、惟神 靈幸倍坐世」

と祈つてゐる。暗は益々深くして、なまぬるい風が腰のあたりを管めて通る。

照國別「人の命を取り食ふ

曲津の數多アリナ山

暗の帳に包まれて

茲に二人の石枕

眠る間もなく人食ひの

怪しき神が現はれて

其泣く聲を尋ねれば

國照別の肉の宮

一目見てもさへうまさうだ

それに従ふ淺公の

奴の體はさきことなく

味が悪さうな穢なさうな

こんなヤクザ者喰た所で

腹の力になりませぬ

腹を損じて明日の夜は

七轉八倒せにやならぬ

それ故淺公の肉体を

食つてやるのは止めておかう

本當に食ひたい〜と

喉がなるのは親分の

國照別の肉の香だ

さはさり乍ら神徳が

體一面充ち満ちて

齒節の立たぬ苦しさに

此場を見すて、歸りゆく

之から淺の乾兒等に

うまい物をば澤山に

喰はして肉を肥滿させ

脂の乗つた其上で

改めお目にかゝるだらう

國さん淺さん左様なら

之でおいこま致します

……と唄ひもつて魔神の奴、下駄を預けて歸りよつた。オイ淺公、確りせぬと助か

らんど」

淺「オ、親分、そんな事魔神が云ひましたか、嘘でせう」

國照「お前の耳には聞けなかつたらう、俺が魔神の言葉を翻譯すると、つまりあゝなるのだ。珍の國の人間とテルの國の人間とは日々使ふ言葉が變つてるやうに、人間と魔神とは又言葉が違ふのだ。鳥でも獸でも皆言葉があつて互に意思を通じて居るのだからなア」

淺「そうすると親分、貴方は神さんみた様な御方ですな。結構な城中に生れ、珍の國の國司になる身を持ち乍ら、物好にも程があると思ひ〜、乾兒に使はれて來ましたが、魔神の言葉が分るとは、本當に感心致しました。親分々々といふのも勿体なくなりましたよ」

國照「兎も角、お前の體は穢しうて、味が悪くつて、喰へないよ云つてたから、マ

「安心せい。險呑なのは俺だ。俺は若い時から榮耀榮華に育てられ、體が柔かく出て来るごみね、國の體が喰ひたいご云つたが、お蔭で御神徳があるので、此古垂れて歸りよつた。併し淺公に甘い物をくはせ充分脂を乗せておいて呉れ、其時に又現はれて、バリ／＼とやるご云つたよ。随分用心せないと可けないよ。だから甘い物があつたら、皆俺に食はせ、お前は精計り喰つてゐたら脂ものらず、魔神も見すてくれるのだ、イ、か。命が惜くなければ精出して美食をするんだな、ハ、ハ、ハ、」

淺公は思ひの外の正直者である。國照別の言葉を一も二もなく丸呑にして了つた。

淺「親分さん、貴方は神さん俠客だから、メ、タに嘘は仰有る氣遣ひはありますまい。そうすりや、わつちや、之から一つ考へねばなりませんまい。うまい物は喰はれませぬなア」

國照「そうだ、うまい物は皆俺に食はせご云つたよ」

淺「へーん、うまい事いひますね。魔神の奴仲々氣が利いてるワイ」

國照「魔神も退却したなり、之から一つ宣傳歌を歌つて暗を晴らし、東雲を待つことにせうかい」

淺「宜しういませう」

國照別「故郷の空遙に出で行く二人の仁俠

あはれ今宵はアリナ山の

野宿に肝をひやす

比較的融通の利く俠客の翠丸

人間の想念界に於けると同様

伸縮自在なるも亦可笑し

仁俠を以て誇る淺公親分の

股間の珍器今何處にかある

珍の荒野に彷徨ふか

但しは遠く海を渡つて

龍宮に走るか聞かまほし、珍器の所在

雨はしゆし、霧は深く包む

魔神の怪聲は頻りに至り

寂寥の空氣刻々に身に迫る

あ、人間の腑甲斐なさ

暗夜に會へば

忽ち寂寥におのゝく

いかにして天地の經綸者

萬物の靈長たるを得ん

故里の空遠く回顧すれば

珍の都に残れる相思の人々

吾魂を引き留むるが如く思ひゆ

進まんごせば小膽なる淺公のあるあり

退かんごせば故郷の友人に恥かし

あ、如何にせむ

アリナの山の夜露の宿

星もなく月もなく

入重雲のふさがる下に

臆病武士と相共に

ふるふて一夜を送る吾ぞ果敢なき

あゝ、惟神 々々

御靈幸はひましましてよ」

淺

公「アリナ山下りてこゝに來てみれば

暗の帳に包まれて

行手も知れぬ苦しさを

魔神は夜半に現はれて

親分乾兒の胸冷す

健氣にもわが命

取り食はんといひし魔神の叫び

一寸味をやりよるワイ

さり乍ら此淺公は

全身骨を以て固めたる

齒節も立たぬ剛力に

呆れたのか魔神の群

豊かに育ちし親分の君

肉柔かく血の香芳ばしく

わが身の食料には最適當だ

言葉のをこして歸り行く

魔神も仲々食へぬ奴

味な事をいひよるワイ

思へばく

あぢ氣なき浮世だなア

暗は益々深くして胸は益々打ふるふ

血管の血は凍り肉は引きしまり

髪の毛は立つ

あ、惟神、救はせ給へ

わが弱き魂を

あ、惟神、開かせ給へ

わが清き強き魂の光を」

斯く二人はいろ／＼な事を口ずさみ乍ら、一夜をあかし、ホンノリミ足許の見ゆる頃、又もや急阪を下り、アリナの瀧の懸橋御殿を指して進み行く。

(大正一三・一・二四、舊一二・二・一九、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第一五章 四

天

王 (一七六〇)

國州、淺州の兩人は午前の十時頃幸うじて、國王依別命が主管してゐるアリナの瀧の懸橋御殿の大廣前に辿りついた。國王依別、玉龍姫夫婦は祭服を着し、數多の信徒と共に、月例の祭典を了り、宣傳歌を奏上してゐる。

國に依「アリナの瀧の水清く

此谷間のいや深き

神の恵に包まれて

懸橋御殿に朝夕に

眞心さ、け仕へゆく

吾は國王依別の

神に仕ふる宣傳使

玉龍姫と諸共に

皇大神の御教を

アリナの山の空高く

テルの荒野のいや廣く

海の外迄傳へゆく

あ、惟神々々

世は常暗となりつれど

遠き神代の昔より

神の恵は變りなく

四方の民草恵みまし

世の荒風も醜雨も

凌ぎて安く世をわたる

テルの國こそめでたけれ

旭は清くテルの國

夕日も清くテルの國

月は御空に鮮かに

天傳ひつゝ、テルの國

濱の眞砂の數多く

御空の星もテルの國

月照彦の皇神の

現はれ玉ひし鏡池

常夜の暗を照らしつゝ

稜威輝くテルの國

天照神の恵にて

大海原より打よする

わざも豊に國原は

地上に生ふる人草は

神を敬はぬ者ぞなし

底津岩根のテルの國

聖き御前に鹿兒自物

神嘉ぎ仕へ奉る

身魂の恩頼を謝し奉る

七八九つ十たらり

野山は青く水清く

波も静に漁りの

稲麥豆粟よく稔り

朝な夕なに嬉しみて

けに高砂の名に負へる

傾有玉ふ國魂の

膝折りふせて大稜威

あ、惟神々々

一二三四五六つ

百千萬の國人が

朝な夕なに大前に

千重の一重に酬いん

今日の生日に月例の

海川山野くさくの

いとさわくに置足ひ

旭は照ることも曇ることも

太西洋はあするとも

瀧の流は干ることも

露に霑ふ民草の

心の花ぞ麗しき

い寄りつぎひて御恵の

三五の月の照り渡る

御祭仕へ奉り

うまし物をば横山の

真心捧げ仕へゆく

月は盈つことも虧くることも

アリナの山は崩ることも

千代に盡きせぬ神恩の

心の色ぞ麗はしき

此世を造り玉ひたる

無限絶對無始無終

神徳強き國の祖

國治立の大御神

世人を治く救ひます

神素養鳴大神の

貴の御前に畏みて

天津祝詞の太祝詞

た、へまつるぞ嬉しけれ

あ、惟神々々

御靈の恩頼を謝しまつる」

と歌ひ了り、四拍手して神前を退き、二柱は數多の信徒に笑を湛へて目禮し乍ら、己が居間へと進み入る。

國、淺の兩人は信徒の中に交はりて此祭典に列してゐた。淺州は國照別の耳に口を寄せ、

淺「何と莊嚴な宣傳歌だありませぬか。そして此處の神司は随分老耄の様だが、其言靈は十七八の若者の様な涼しい清らかな聲を出すだありませぬか。あの聲を聞くに私はふるひ附く程好になりました」

國「心さへ清淨潔白にあれば、言靈も濁らないから、あ、いふ美しい聲が出るのだ。俺達も之からは魂を清めて聲の年がよらないやうにしたいものだ。こゝは昔俺の親爺から聞いてゐるが、親爺の友達の龍國別といふ宣傳使が、自分の母親や弟子共と共に、玉よせの芝居をやつた所だそうなの。其時に龍國別母子がソツト黄金の玉を失敬してアリナ山を遙々越へ珍の原野迄いつた所、神様の戒に會うて悔い改め、其次に高姫といふ我が強い宣傳使がやつて来て、又其玉の爲に神様に脂を搾られ改心したといふ歴史の残つてゐるお宮様だ。龍國別が途中で神様に取上げられた黄金の玉が御神体となつて、此お社に祀つてあるといふ事だから、俺達も三五教の信者たる

以上は、満更縁のない者でもない。さうだ、今晚此處でお通夜でもやつて御神徳を頂き、アリナの瀧で身をうたれ、それからポツ／＼目的地へ行かうぢやないか」

淺「それは誠に至極結構でせう。何なら親分、ヒルの國なんて、山河數百里も隔てた遠國へ行くよりも、山一つ越ゆれば、自分の生れた國だから、一層の事、此處で暫く尻を据ゑたら何うでせう。別にヒルの國迄行かなくても、俠客にはなれますよ」

國「一旦男子が思立つた事は中途にやめる譯には行かない。絶壁前に當るとも、白乃頭上に閃くとも、一旦言あけした事は實行せなくちや男とはいはれない。まして男の中の男一匹と、世間に持てはやされ、仁俠を以て世を救ふ大望を抱いた吾々、そんな腰の弱い事が出来ようか。お前は厭なら厭で可いから、此處に何時迄も固着してゐるが良からう、俺は一人でやつて来るからう」

淺「さうも御供致します。然し三日や四日はお骨休め、足休めの爲、此處でお籠りしたら何うでせうか」

國「先づ二三日瀧に打たれて、体を淨め、鏡の池の神様に神勅をうけ、そしてポツ／＼行く事にせう」

淺「ヤ、それで安心しました。そんなら之からお瀧へ参りませうか」

國「ヨシ、先づ第一に身禊をやつて來う」

といひ乍ら、拍手再拜し、口の奥で天の數歌を稱へてゐると、信者の風をした十四五人の男、前後左右よりバラ／＼と取圍み、兩人の首筋をグッと握り、剛力に任して押へつけた。淺公は驚いて、

淺「アイタ、、、ナ、何をさらすんだ。コリヤお前達ア、神様を信心してる信者ぢ

やないか。人の首筋を押へて何うするつもりだ。イイ痛いワイ、何ちやい。人の手を後へ廻しやがつて……何俺が悪い事したか……モシ親分、タ、助けて下さいな」
國照別は剛力に押へられ、俯向いた儘、阿伝の息を凝らし、隙をねらつてゐた。息の調子を計つて、バツとはね起き、矢庭に大の男四五人を取つて投げた。淺公を押へてゐた大男も吃驚して手を放した。淺公は矢庭に座敷の真中につつ立上り、大手をひろげ、手に唾し乍ら、

淺「サー來い、珍の都に於て隠れなき白浪男の淺公さんとは、こなはんのことだ。いらざるちよつかいを出して後悔を致すな。乾兒い俺でさへも此通だ、俺の親分を何と心得てゐるか、珍の一國の國の柱の國さんだぞ」

此中の最も大將らしき奴、行儀よく疊の上にキチンと坐り兩手をついて、

男「誠に失禮をいたしました。私は伊佐彦老中の部下に仕ふる、はした役人共でまいります。國照別の世子様が、珍の都に身をおこして、お忍びになつたといふ事が城下一般にひろがり、それから大勢の者が手配りを致しましたが、さうしても御行衛が知れぬので、ヒョ、としたら他國へ逐電されるかも知れないと、十數人の手下を引つれ、一方口の此館に信者と化込み、様子を考へてゐた所、今日計らずも、世子様のお出で、誠に恐れ多い事でありますが、吾々がお供を致しますから、さうぞ國へお歸り下さいませ」

國「お前達は誠に御苦勞な役だ。願によつて歸つてやるのは易い事だが、俺も最早決心した以上は、一歩も後へ返す事は出来ない、諦めて歸つてくれ。何れ永遠に珍の國を見ずてゐるのではない。俺には俺の考へがあつての事だから、素直に歸つたが

可からう」

男「私は深溝役所の目付でムいまして、駒治といふ者でムいます。左様な事を仰せられずに、一先づ御歸り下さいませ。珍の城下は大變な騒でムいますから、一度歸つて頂かねば、衆生が塗炭の苦みに陥ります。衆生を愛し下さる真心があるなら、どうぞ私がお供を致しますから、此場より御歸りを願ひます。貴方が御歸り下さらねば、吾々は再び都へ歸る譯には參りませぬ」

國「別に都へ歸る必要はないぢやないか。生活の保証は俺がしてやるから、さうだ。俺は國州といふ俠客と遺俗したのだから、汝等も俺の乾兒となり、天下の男伊達と名を賣つたらさうだ。そして腕を研いた上俺は故國へ歸り、國の眞柱となる積りだ。其時はお前も拔擢して、大取締位に使つてやるが、こゝは一つ思案の仕所だ」

さうだ、俺のいふ事が合點がいたら、否應なしにすぐに其十手をこの谷川へ捨て、了へ」

駒治は心の中にて……一層の事、俠客にならうかなア、何といつても、珍一國の御世子だ。其方が斯うして身をおとし、白浪男になつて世の中を救はうとなさるのだから、何時迄も役人の端に加はつて居つても、先が見えてゐる。一層潔よく降參せうかな……と早くも決心して了つた。然し乍ら大勢の部下に對し、直ちに服従する譯にも行かず部下の顔色をソツと窺つてゐる。

國「オイ一同の者共、今日から俺の乾兒だ。俠客でなくつても、高砂城の未來の國司だ。そうすりやお前たちは皆俺の乾兒だ。さうだ否應あるまい。其ベラ／＼した十手をねち折つて谷川へ放る氣はないか」

駒治「何卒私を貴方の直參の乾兒にして下さいませ。如何なる事でも御命令に服従致します。証據は此通でムいます」

と十手を、眼下の谷底へ投込んで了つた。他の捕手連中は去就に迷ひ、目を白黒させて駒治の顔を見つめてゐるが、市公、馬公の兩人を除く外、十手に手をかけたまま、列をつくり、駈足の姿勢で、怖そくに館を逃げ出しアリナ山を指して逃げ歸りゆく。後見送つて國照別は

國「ハ、、、駒治、市に馬、誠の者は三人になるかも知れんぞよ……とはよく言つた事だ、三人世の元結構々々だ。お前達新歸順新侠客が三人、俺達二人を合すれば五人となる、嚴の御靈だ。三五の明月だ。ヤ、目出たいく、サア是から神様に御禮を申し上げよう」

駒治「御世子様、そんなら今日から、誠にすみませぬが、貴方を親分と申しても宜しうムいますか」

國「きまつた事だ、親分國州さんと云つてくれ。市も馬も其通だぞ。窮屈な取締をやめて脛一本、沼矛一本の男一匹になるのは男子の本懐だ。汝も之で救はれたのだ。ヤッバリ靈がい、とみわて、俺の心が分つたと見わるワイ、アッハ、、、」

駒治「エー、親分に申し上げますが、早く此場を立去らないと、今歸つた十三人の奴、都へ歸り、伊佐彦老中へ報告するに間違ひありません。そうすりや捕手がやつて来る、險香ですから、何ぞか身隠しをせななりませんまい」

國「ナアニ、心配するな、此急阪を登り下りして、それから廣い野を渡り、都へ歸るにも五日や六日はかかる。それからやつて來た所で、又五日や六日は時日が要る。マ

アここ十日位は大丈夫だ。ゆつくり身褌でもして神勅を受け、それから自分の方針を徹底的にきめるのだ。そんな事に醒醒して頭を痛めてゐるやうな事では到底俠客にはなれないぞ。ヤ面白いく、俺もメて乾兒が四人出来たか、四天王の勇士、しつかり頼むよ」

淺「モシ／＼親分さん、四人の中で順序を立て、おかねばなりませんねが、誰が此中では一番兄貴になるのですか、キツ私でせうね」

國「時間に於てはお前が兄貴だ。併し乍ら腕力と腕力に於ては怪しいもんだなア。何は兎もあれ、お瀧へ身褌に行く事にせう、一二三四」
と言ひ乍ら懸橋御殿を後に、水音轟々として響きわたる瀑布の傍に一行五人辿りついた。無心の瀧水は何を語るか。囂々々々として地をゆるがせ、無数の飛沫には日光

が映じて、何も言はれぬ寶玉の雨を降らしてゐる。

(大正一三・一・二四、舊二二・二・一九、伊豫 於山口氏邸・ 松村眞澄録)

第一六章 波

動 (一七六一)

國照別一行はあたりの果實をむしり乍ら、飢を凌ぎ三日三夜の身禊を修し、鏡の池の由緒深き靈場に參拜し聲も涼しく宣傳歌を奏上した。

國照別

「アさ日は清く明らけく

イてり通すテルの國

ウき世の惱みを他所にして

エらまれ切つた身魂等が

オさまりぬます懸橋御殿

カみも平らに安らかに

キこしめすらむ真心の

クに照別の御願

ケしきいやしき曲道を

コン本的に改良し

サかた盡させぬ珍の國

シきます國魂大御神

スすしき聖き太祝詞

セかいの爲に宣り上げて

ソぐりし身魂を救ひ上げ

タすけて生かす高砂の

チとせ榮ゆる松の教

ツきは御空を隈もなく

テらして暗を晴らしつゝ

トこ世の國まで救ひ行く

ナみに漂ふ高砂の

ニしと東の珍の國

ヌしとなるべき吾魂も

ネぞこの國の惱みをば

ノぞかぬうちは是非もなし

ハやく身魂をあらためて

ヒロく尊き御惠の

フゆを世界に現はして

ヘい和に民を治め行く

ホまれも高き珍の國

マハらば一つの三五の

ミちの光に陰もなし

ムかしの神代に立替へて

めぐみ治き草の露

モもの神人勇み立ち

やすく楽しく何時迄も

イのち榮えて國の爲

ユウ冥界を救ふ爲

エイ遠無窮の生命を

ヨさし玉へ願ぎ奉る

ワが言靈の大前に

キてり通らい奉りなば

ウき世の雲をかきわけて

エがほに充てる神の顔

ヲがませ玉へ惟神

國照別が善惡の

世のさまうつす鏡池

玉の宮居の御前に

畏みく願ぎ奉る」

と歌ひ終り、拍手し、傍の巖に腰を打かけ、昔の歴史話に移る。

國「オイ、乾兒共、此鏡の池は一名言靈の池と云つて高砂島第一の神秘的な靈場だ。

真心を以てこちらから言靈を發射すれば、キツト神様が言靈を以て答へて下さるそう

だが、さうだ一つ瀧で身を淨めて來たのを幸ひ、神様に伺つて見ようかい」

淺「如何にもソラ面白うムいませう。こゝで乾兒の順序を袖様に聞いて定さして貰ひ

ませう。それが公平で互に怨恨が残らいで宜しいからなア」

國「それも結構だ。そんなら淺公、お前から一つ神様に願つて見よ」

淺「ハイ承知しました」

と云ひ乍ら拍手再拜し、

淺公「惟神、昔の神の坐しませば

示させ給へ吾願言を。

言靈の池に名を負ふ齋場なれば

答へ給はむ吾言の葉に」

忽ち鏡の池はブク／＼と異様な泡を吹き出した。

國照別外一同は早速の感應に襟を正し、片唾を呑んで畏まつて居る。淺公も小氣味が悪くなつたが、後へ退く譯にも行かず、額から冷汗を流し乍ら、

淺「ア、有難や辱なや、鏡の池の生神様、俠客の淺公が朝間も早うから、阿呆が足らいで、あられもない事を御申しますが、さうぞ、あら立てずに、あらまして宜しいから、御神徳をあらはして下さいませ」

鏡の池から

「アッハ、、、淺公の淺智慧の阿呆奴、開いた口が塞がらんワイ」

淺「イ、いけ好かない、イ、、、の一番から人を罵倒する神が何處にありますか、ウ、うるさいと思はずに、さうぞ真面目に私の願を聞いて下さい。國さんの乾兒の中に於て誰が上になるか下になるかと云ふ事を聞かして貰へばそれで良いのです」

池の中から、

「エ、偉い奴が、上になるのだ、オ、劣つた奴が下になるのだ。そんな事をカ、神に聞かすとも、キ、氣が付き相なものぢやないか。ク、國照別の國公の乾兒になつた以上は、汝も俠客だ。一つケ、喧嘩でもして力比べを致し、コ、こつかれた奴が乾兒になるのだ。サ、騒ぐには及ばぬ、今の世は言論よりも實力だ。シ、主義も絲瓜もあつたもんぢやないぞ。ス、速に實行する奴が數多の人氣を、セ、制するのだ。今に珍の國にはソ、騒動が起るから、タ、

互に靈を練つて、生死のチ、巷にかけまはり、体も魂も人に秀れて、ツ、強くなつておかねば、テ、天下は取れんぞよ。ト、遠い國へ駈落致し、ナ、何かの事を研究し、天晴立派な男伊達となつて、故郷へ、ニ、錦を飾り、親に反いて國許を、ヌ、ぬけて出た贖ひを致し、ネ、根の國底の國の國民の苦を救ひ、ノ、長閑な、神代に立直さねばならんぞよ。ハ、早く靈を研ぎ、ヒ、一人でも靈の研げた者を集め、勢力をフ、ふやして、ヘ、平和と人道の爲に社會に貢獻するホ、方策を定めたが良からう。マ、誠一つが世の寶だ。ミ、身を粉に致し、ム、昔の神の教を遵奉し、メ、名利に耽らず、モ、諸々の慾に離れ、ヤ、大和魂を研ぎ上げ、イ、嚴の御靈の教に従ふて、ユ、勇敢に大膽に、エ、遠慮會釋も無く、ヨ、世の爲に活動するのだ。ラ、亂世の今日、リ、

倫常は地に落ち、ル、累卵の危き各階級の狀態、レ、連年の不景氣に人心は惡化し、ロ、老骨は上に立つて國政を料理し、最早珍の國の人心は收拾す可らざるに立至つて居る。ワ、我身の出世計り考へて他人の事はキ、指一本そへてやらんと云ふ惡黨な世の中だ。ウ、有爲轉變の世の中は、何時變るか知れないぞ。エ、遠國へ行つて、魂を研ぎ、天晴れ、ヲ、男となつて、コ、三年の内には歸つて來よ。淺公計りでない、親分の國州、其他一同の者に氣をつけておく。そうして駒治は國州の一の乾兒と神が定めるぞよ、ブル〜〜〜ウ〜」

と唸つたきり、後はコトツとも言葉は無くなつて了つた。

駒治「鏡の池の神様、さうも有難うムります。貴神の仰有ることは良く合いました。私の思ふ通り云つて下さいました。惟神靈幸倍坐世」

淺「オイ駒州、此神はチット審神の必要があるぞ。大方汝の副守か何かと飛出しやがつて、あんなこと吐いたのだらう。エー、ケッタクソの悪い、誰が何と云つても俺が一の枝だからのう」

駒治「一の枝だから駄目だぞ云ふのだよ。松の木でも見よ、一の枝が枯れて二の枝、二の枝が枯れて三の枝が出来、後から〜立派な枝がより以上大きく出るぢやないかマア兎も角神様の仰有る通りに任しておくのだなア」

國「ハ、ハ、先づ此處で、それ程神様の神勅を疑ふのなら、力比べをやつて見よ。喧嘩さす互に疵がついて可かんから、神様の前で角力でもとつて、勝つた奴を一の乾兒にすることにせう。淺公お前も得心だらうなア。お前も先夜の事を思へば餘り威張れんぢやないか」

こゝに二人は一番勝負の角力を取り、いよく駒治が國州の一の枝と定まり、意氣揚々として山を降り蛸取村の海岸に出た。

國照別一行は蛸取村の海岸に息を休め乍ら渺茫たる海原の景色を眺め、愉快けに歌つて居る。

國州「雲か山かはた波か

渺茫千里の盪の波

淺ましき人間の眼を以て

大西の洋に臨む

十里二十里三十里

僅に視線は働けども

いかにせむ海の彼方に

漂へる國の姿の

目に入らぬ悲しさ

行交ふ白帆は

花瓣の如く

波のまに〜

清く輝く

吾は今

磯邊に立ちて

廣大無邊の

天地に踞踏し

人間の身の

いと腑甲斐なきを

深く／＼歎く

あゝ吾今

住みなれし故國を捨て、

始めて此廣き海洋の波に接す

珍の國は廣しと雖

此海原に及ばんや

大空の雲と

海原の波と

相接する所

定めて麗しき寶國あらむ

あゝ思へば／＼

微弱なる人間の身よ

いと雄大なる

天地の現象

宇宙の攝理

今更乍ら

吾胸は轟き始めぬ

吾志すヒルの都は

果して何處ぞ

彼の遠き紅の雲の

眞下ならんか

はた又それよりもズツと秀れて

遠き／＼低き雲の

眞下に在るか

思へば

わが前途は

極めて遠遠なり

四人の供人を引つれて

際限もなき

原野を行く

吾心の波の高さよ

吾胸の騒ぎよ

沈静せしめ給へ

天地の司宰とあれませる

國治立大神

荒金の地を領有給ふ

神素蓋鳴大神よ

帆は白し波は高し

空は廣く雲は低し

吾等五人の前途を守らせ給へ

と詠じ終り、國照別は先頭に立ちて、傳來の古き宣傳歌を高唱し乍らテル國街道を北へくと進み行く。

(大正一三・一・二四、舊一二・二・一九、伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第四篇 新政復興

第十七章 琴

玉 (二七六二)

神の恵に蔭もなき、名さへ目出たきヒルの國の高倉山の本城は堅磐常磐に都の中央の下津岩根に巖然と立並び、三五の貴の教と共に國家は益々隆昌に赴き、日暮河の清流は清く都の中心を流れて、交通運輸の便宜よく、けに地上の天國と稱へらるゝに至つた。

楓別命、清子姫の二人の間に國愛別、清香姫の一男一女があつた。祖先の清彦が日出神の神徳を受けて、茲にインカ國なるものを樹て(日の神の子孫の意)衆生崇敬の的となつてゐた。衆生は楓別命を國司と仰ぎ、大師と崇め、親と親しみ、上下一致餘り煩はしき法規もなく、極めて平穩無事に榮えてゐた。然るに常世國より交通機關

の發達につれて、種々の悪思想往來し、比類なき天國の瑞祥を現はしたる此神國も、今は漸く人心動搖し、個人主義の教發達して、遊惰の者多く現はれ、不良老年、不良中年少年は上下に充ち、義を忘れ利に走り、恰も常世の國の狀態となり、國司を輕んじ、役人を卑しめ、民心惡化して不安の空氣は國內にみちて來た。楓別命、清子姫は朝夕神に祈り、國家の隆昌と衆生の安寧を朝な夕なに國魂の宮に祈願しつゝ、あつた何時の間にやら世子たるべき國愛別命は姿を隠し、行衛不明となつて了つた。楓別夫婦を始め、秋山別、モリスの兩老は額に青筋をたて、部下の役人を督して國內隈なく搜索すれ共何の手掛りもなかつた。茲に於てか止む得ず、大會議を開いた結果、

妹の清香姫をしてヒルの國の世子とする事となつた。

清香姫も兄の命と同様、時勢の日にくブル階級に非なるを知り、如何にもして我

國家を救はん三肝膽を砕きつゝ、あつた。されども昔氣質の兩親を始め、時勢に眼暗き老臣等は一々清香姫の意見に反對し、いつも用ひられなかつた。清香姫は國家の前途を思ひ泛べて夜もロクに眠られず、神明に祈つて、國家に蟠まる妖雲を一掃し、新しき天地を開かんと、そのみに心を砕いて、身は日に夜に瘦衰ふる計りであつた。

モリス、秋山別の老臣は城内の評議所に首を鳩めて、心配氣に何事か嘯き合つてゐる。

秋山「モリス殿、此頃の如き姫様の御様子、御身は何う思はるゝかな」

モリス「左様でゐる、察する所、氣の病ではあるまいかと御案じ申してゐるのだ。貴殿の御考へもヤハリ氣病と思はれるだらうな」

秋山「いーかにも、左様でゐらう。今から思ひ出せば、拙者も貴殿も、紅井姫様、エリ

ナ様について戀におち、終にはシーズン河の難に遭つたといふ歴史もムれば、まして妙齡の美人、戀病を患ひ給ふは當然でムらう。一時も早く適當な御養子を迎へて姫様の御心を慰めねばならうまい。いつも姫様が、吾々に對し、氣の利か爺だくゝと仰有るが、今考へてみれば、早く妾に夫を有たせ、氣の利か爺だ謎であつたかも知れぬ、戀に苦勞した吾々に似ず實に迂闊な事でムつたワイ」

と兩人は一も二もなく、そんな妙な所へ氣を廻して了つたのである。

秋山「それにしても、適當な御養子を選まねばなるまいが、露骨に姫様へ伺つてみたら何うだらうかな」

モリス「マサカ、貴女の夫は誰に致しませうか……なきと、餘り失禮で、いふ譯にもゆかず、困つたぢやないか」

秋山「併し、候補者を二三人物色して、寫真でも撮り、姫様の居間にソット散らしておき、姫様がお氣に召したら、ソット机の引出へ收めておかれるだらうし、氣のくはぬ寫真は、あの御氣象だから、屹度引裂くか墨をぬらつしやるに違ひない。そして姫様の心を漸踏した上、遠廻しにかけて探つてみようでないか、之が老臣たる者の肝腎要の御用だらうと思ふ」

モリス「成程、それでは拙者が、部下の相當な家庭に育つた清家連の伴の寫真を集めることに致さう。でもさても善い所へ氣がついたものだ。惟神 靈幸倍坐世」

と勇み立ち、兩老は日も漸く下つたので吾家へ歸りゆく。

話替つて清香姫は城内の庭園を侍女と共に逍遙し乍ら、ダリヤの花を二つ三つちぎつて手に持ち乍ら、吾居間へ歸つて來た。見れば机の上に、なまめかしいハイカラ

男の寫眞が四五枚ズラリと並んでゐる。清香姫は一目見るより侍女を遠ざけ、襖を密閉してよくよく見れば、頑迷固陋派の清家の悴の小照であつた。清香姫は一々其寫眞を點檢し寫眞の上から墨黒々々一首の歌を書添へておいた。

「此姿見れば見る程厭らしき

根底の國の亡者なるらむ」

又一枚の寫眞に

「さいこ樋目鼻をつけたやうな面

今打た、き破り捨てたし」

又一枚の寫眞に向ひ、

「折角の男の子の姿に生れ來て

女に似たるあさましさかな」

又一つの寫眞に

「ぞれ見ても誠の魂は一つだに

なしと思へば悲しくなりぬ」

最後の寫眞に

「チト許り男らしくは思へども

わが背の君なる魂でなし」

と樂書をして状袋に入れ、「秋山別、モリス兩老殿」と表面に記し、手を拍つて侍女を招んだ。侍女の春子は襖を靜かに押開け、

春子「姫様、お招きになりましたのは何か御用でムりますか」

清香「春、お前御苦勞だが、之を持つて秋山別、モリスの所へ届けて下さい。そして返事を聞くに及ばないから、渡してさへおけばトットと歸つて来るのだよ」

春子は「ハイ畏まりました」

と足早に立つて出でてゆく。後に清香姫は一間を密閉し、二絃琴を取出して心靜かに述懐を歌つてゐる。

清香姫「妾は夜なきヒルの國

高倉城の國司の娘

清香の姫と生れ來て

兄の命と諸共に

月よ化よと育くまれ

何の不自由も夏の宵

涼しき浴衣を身にまとい

時雨の川に船遊び

何不自由なき上流の

社會に育ちし身の因果

世の有様も明かに

悟り能はぬ目無鳥

ヒルの御國も末途に

夜の暗路とならむかど

思へば悲し足乳根の

父の行末母の身の上

救はむ爲に兄妹は

互に心を照し合ひ

世の潮流に従ひて

危き國家を救ふべく

神に祈りて待つ内に

嬉しや時の廻り來て

兄の命は逸早く

これの館を脱け給ひ

朝な夕なに霜をふみ

つぶさに世情を嘗め給ふ

吾は孱弱き女子の

兄に代りて只一人

此神國を守らむと

心を千々に碎けども

昔心の取れやらぬ

父と母との心意氣

秋山別の老臣や

頭迷固陋のモリス等が

清家と云ふ無機物を

此上なき物と珍重し

國の政治は日に月に

日向に氷と衰へて

神の依さしのヒルの國

埋もりゆくこそ悲しけれ

又何者の悪戯にや

吾心根も白雲の

靈も暗き仇男

怪しき姿を寫し出し

わが文机に並べおく

醜の企の恐ろしさ

察する所秋山別や

モリスの企みし業ならめ

斯くなる上は片時も

これの館に住むを得じ

又誘惑の魔神の手に

捉へられては一大事

兄と誓ひし神業は

いつの世にかは成りまけむ

今宵の暗を幸に

用意萬端と、のへて

侍女をもつれず只一人

進み行かなん珍の國

山は嶮しく川深く

嵐は強く雨しゆく

魔神の輩多くとも

此世を思ふ真心を

我三五の大神は

必ず愛させ給ひつゝ

吾兄妹の望みをば

必ず立てさせ給ふべし

今宵を限りに此館

出でゆく吾身の果敢なさよ

あ、足乳根の父上よ

母上御無事にましくて

吾兄妹が神業の

完成するのを待たせませ

吾ゆく後は嘸やさぞ

頭迷回陋の老臣が

狼狽へ騒ぐ事だらう

其有様が目のあたり

目にちらついて憐れさも

一入深き秋の空

常夜の暗に包まれし

悲しき思ひの浮ぶかな

あ、惟神々々

御慶幸はひまし〜て

清香の姫が宣り言を

いと平けく安らけく

遂げさせ給へご願ぎ奉る

旭は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

動かざらましヒルの國

地揺り山裂け河溢れ

海嘯は高く襲ふことも

下つ岩根に永久に

築き上げたる此城は

千代に入千代に碎けまじ

あ、さり乍ら〜

此の衆生をば如何にせん

思想の洪水氾濫し

日暮河の堤防は

將に崩壊せんとする

此惨状を見乍らも

尙泰然と控へるる

老臣たちの愚かさよ

妾兄妹無かりせば

ヒルの都も衆生も

忽ち修羅畜生の

地獄の淵に陥らむ

守らせ給へ惟神

神かけ念じ奉る」

と一生懸命に歌つてゐる。其處へ襖の外から秋山別、モリスの兩人一度に「姫様々々」

と呼ばはつた。姫はあわて、琴の手をやめ、そ知らぬ顔にて、

清香「其聲は秋山別、モリス殿ではないか、何用か知らないが、襖を開けてお這入りな
よ」

兩人は姫の言葉に、渡りに舟と打喜び、もみ手し乍ら、襖をあけて入り來り、丁寧
に辭儀し乍ら、何事か言ひ出さんとしてモヂくしてゐる。

清香「最前、春子に持たしてやつた品物は、お前受取つて呉れたらうな」

秋山「ハイ、確に拜見致しました。それに就て姫様に御伺ひ致したのでムいですが、
あの五枚の寫眞はヒルの國に於ては、地位といひ門閥と云ひ、學問といひ器量とい
ひ、最も選拔された、ヒルの國の五人男といはれてゐる賢明な名を取つた名物男で
ムります。姫様も良い年頃、餘り露骨に申上けるも如何と存じ、モリスと相談の上

ツツト寫眞を集めて御意を伺つた次第でムいます。然るに姫様は無造作に、寫眞の
表に墨くろくくと歌をお書きになりましたが、一向其意を得ませぬので、さうぞ御
心の在る所を忌憚なく仰せ聞け下さらば、吾々兩人が如何様とも取計らふでムりま
せう」

清香姫は何と云つても今晚は都合よく此場を逃さねばならんのだから、餘り怒ら
して警戒を嚴にさせては却て不利益と早くも合點し、ワザと空呆けて、

清香「ホッホ、、、、恥しいワ、さうかゆつくり考へさして頂戴、ねわ」

秋山「御考へなさるも結構でムいませうが、一時も早く結婚問題をきめなくては、吾々
老臣の役が濟みませぬ。私が裏に一號二號三番號をつけておきましたから、姫様
のお口から、一寸何號だといふ事を仰有つて下さいませぬか」

清香「そうだなア、一號でもよし、二號でもよし、三號でも四號でも五號でもよしだ、

どうでもよしだ、ホ、、、」

モリス「モシ姫様、そんなアヤフヤの御返辭をされちや困るぢやありませんか。何號なら何號とハッキリ言つて下さいませ」

清香「ホ、、、一生(升)の事を定めるのに、五號(合)では足らぬぢやないか、モウ五合許り集めて来て下さい、そしたら返辭をするからね」

モリス「姫様、之でまだ足りないに仰有るのですか、之はモウ第一流ですよ。後はモウ第二流になりますから、連もお氣に入りましたね」

モリス「丸で小間物屋が店出しをしてるやうな事を云つてゐる。」

清香「とも角、今日は餘り突嗟の事で決まらないから、明日中に、之といふのをきめて

御返事をする。兩人共、お父さんお母さんの手前、宜しく頼んだぞや」

秋山別モリスの兩人は、ヤレ嬉しや、之で一安心と笑顔をつくり追従タラ〜機嫌を取り乍ら、頭を二つ三つ掻いて、

兩人「姫様、左様ならば、一時も早く御返事をお待ち申上ひます」

と言葉を残してスタ〜と此場を去つて了つた。清香姫はニタリと笑ひ、又もや琴を取よせて思ひの丈を歌ひ始めた。

(大正一三・一・二四、舊一二・二・一九、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第一八章 老

狼 (一七六三)

清香姫「千早振、神代の昔天教の山より天降り給ひたる

日出神の神柱 吾祖神を導きて

此世を清むる三五の 教を開かせ給ひしゆ

神の御稜威は四方の國 島の崎々磯の隈々

落ちなく漏れなく擴がりて 天の下には曲も無く

青人草は村肝の 心の中より昧び合ひ

さながら天津御國の天國の 姿映せしヒルの國

インカの裔を崇められ 親と親とは底津根の

堅磐常磐の岩の上に 珍の宮居を築きつゝ

珍の柱のいや太く 立榮わたる神柱

諸人仰がぬ者もなし 近き御代より常世國

邪の教蔓りて 天を曇らせ地汚し

青山をば枯山となし 世人の心荒び果て

昔の儘の神國は 今や魔國とならんぞす

深夜枕を擡げつゝ 世の行先を窺へば

ヒルの都に醜鬼の 棲家ありとふ神の宣

入岐大蛇も狼も 虎獅子熊の猛獸も

爪を隠して待ち居るぞ 御神の御告げ聞くにつけ

老 狼

三十五

胸は痛みぬ心さやぎぬ

あ、妾は如何にして

國司の御子と生れしぞ

鄙に育ちし身にしあれば

斯る惱みもあらまじものを

清家とふ忌まはしき空衣に包まれて

身動きならぬ苦しさを

怒み給へ天地の神

兄に誓ひし言の葉を

守りて出づるヒルの城

夜に紛れて山路を

傳ひ／＼て進み行く

道の行手の隈も無く

安く守らせ給へかし

高倉山の此城を

守らせ給ふ氏の神

ヒルの御國を永久に

領有ぎ給ふ國魂の神の

大御前に入雲の小琴を弾じつ、心すが／＼すが掻きの

糸は二筋真心は

只一筋に祈るなり

あ、惟神々々

御靈の恩頼を叫へかし

斯く歌つて居る折しも、烏羽の夜は襲ふて來た。清香姫は密かに身の廻りの準備

なきして子の刻の至るを待つた。

城内の灯も消えて四邊は閑寂の氣漂ひ、只天井に鼠の走る音がシト／＼と幽

かに聞ゆるのみであつた。時分はよしと、清香姫は私かに我居間を忍び出でんとする

所へ、侍女の春子姫は足音を忍ばせ來り、

春子「姫様、未だお寝みぢやういませぬか」

此聲に清香姫はハッとし驚き乍らも、素知らぬ顔して、

清香「あ、其方は春子姫か、お前まだ寝めないの」

春子「ハイ、何だか、今晚に限つて目がさねくゞ致しまして、姫様のお身の上が氣にかゝり、何だか寝られないのでムりますよ」

清香「お前も寝られないかね、妾も何だかチットも寝めないワ」

春子「姫様、歌でも詠んで夜を明しませうか」

清香姫は迷惑し乍らも、

清香「妾もやがて眠れるだらうが、併し一二首歌を詠んで別れませう」

春子「ハイ有難うムいます」

春子姫は姫の側近く座を占め、

春子姫「高倉の表に立てる鐵門守

其まなざしの血走りて見ねぬ。

十五夜の月光覗く裏門は

いと静けし風さへもなし」

清香姫は始めて春子姫が、自分が今夜脱け出すことを悟り、裏門から逃げ出せと教へて呉れたのだらうと感謝し乍ら、

清香姫「行春の月の光に照されて

清く香れる梅の初花。

匂ふとは誰も白梅の奥深き

谷間にもゆる姿かしこし」

と互に歌をかはし、清香姫は、

清香「月の庭園をチットばかり逍遙して來ますから、春子、其方は此琴を弾じて待つて

みて下さる

と云ひ乍と裏口へと忍び行く。裏口には蓑笠、手甲脚絆、杖其他一切旅に必要なものがチャンと整へてあつた。春子姫は涙を泛べ乍ら、

春子「姫様決して、貴女お一人の旅はさせませぬ、さうぞ御安心なさいませ」

と小聲で云へば、清香姫は後振り返り、

清香「何處へ行くのも神様と二人連れ、氣を揉んで下さるな」

と云ひ残り、見つけられては一大事と裏口へ出で、手早く身づくろひをなし、裏門からソット脱け出し、馬場の木立の下を潜つて南へくと急ぐのであつた。後に春子に二絃琴を執り、隔ての襖に錠をかけて、琴を弾じつ、歌つて居る。

春子姫「此處は夜なきヒルの國 ヒルの都の中心地

神の御稜威も高倉山の 岩根に建ちし珍の城

日出神の昔より 三五教の大神を

齋きまつりし珍の城 さはさり乍ら星移り

月日は流れ行くに連れ 人の心は漸くに

あらぬ方へと移ろひて 世は刈菰に亂れゆく

實に淺ましき此天地 清めん爲に皇神の

御心深く悟りまし 若君始め姫様の

思ひ切つての鹿島立 思へばく吾涙

淵瀬と流れて止め度なし 此世に神のます限り

若君様や姫君は 太き功を立てまして

鷹ではヒルの神柱

救ひの君と仰がれて

これの御國は云ふも更

高砂島の端々を

皆其徳に服へて

昔に變るインカの榮わ

松も目出度き高砂の

尉と姥との末永く

治まる御代ぞ待たれける

あ、惟神々々

皇大神の御恵に

姫君様の行衛をば

何卒安く珍の國

兄の命のまします

靈地に無事に送りませ

御側に近く仕へたる

春子の姫が赤心を

捧けて祈り奉る」

秋山別、モリスは吾家に歸つて居たが、何だか胸騒ぎがしてならんで、姫の身の

上に變事はなきかき、兩人期せずして、千の刻過に表門を潜つて入來り、各自の事務室に入つて監視の役を努めて居る。姫の居間よりは流暢な琴の音が聞えて來た。秋山別、モリス兩人は琴の音を聞いて一先づ安心し、兩人は愉快氣に聲高らかに談話を始めて居る。

秋山「モリス殿、此深夜に御老体の貴殿、御苦勞千萬でゐる。何か急用でも出來たので
ムるかな」

モリス「別に之はいふ急用も無けれども、何だか胸騒ぎが致し、或は城中に姫様の身の
上に就て變事の突發せしに非ずやと、取る物も取敢ず、夜中乍らも、供をも運れず
ソツト出て參つた次第でゐる。そして貴殿も亦夜陰に御登城になつたのは、何か感
ずる所があつての事でゐるかな」

秋山「吾々も貴殿の御考への如く、何だか胸騒ぎが致すので、姫の身の上に変つた事はなきやと心配でならず罷り越したので。然し乍ら姫の御居間近く伺ひ寄つて、様子を探れば、いゝ流暢なる琴の音色、ヤレ安心とこ、迄引返して休息致して居る所で。さうやら姫様もお氣が召したと見えて、明日の目が待たれてならぬか、一目も寝ずに琴を弾じて居られるとは、之迄にない事で。テも扱も喜ばしい祥瑞ではムらぬか」

モリス「如何にも御説の通り吾々も若返つた様な氣が致すで。モ一度元の昔の若い身の上になつて見たい様で。アッハ、ハ、ハ、」

秋山「時にモリス殿、姫様は何號が望みであらうかな」

モリス「あの歌によれば、一號二號三號四號は駄目でせう、先づ五號を御採用になるで

せう。秋山別殿、御芽出度う。貴殿の御子息ではムらぬか」

秋山「成程、拙者の悴菊彦も果報者で。拙者と貴殿とは當城の御娘子紅井姫様に對し、大變に苦勞を致して、遂にはあの結果、實に若氣の至りとは申し乍ら、エライ耻をかいたもので。吾悴は父に勝つて、姫様の御意に叶ふとは、テも借ても世の中も變つたもので。オッホ、ハ、ハ、」

と笑聲に入つて居る。

一方春子姫は……最早姫様も落のびられたであらう、ヨモヤ追手もかゝるまい。サア之から妾もお後を慕ひ、姫の御身を保護せねばなるまい。照國街道の一筋道、夜明けに間のない寅の刻、グツ／＼しては居られない……と足装束を固め、裏門より一散走りに逃げ出した。

城内の洋犬の吠る聲がワウウウと切り響き来る。秋山別、モリスは此聲に耳を澄ませ、

秋山「何時にない犬の泣聲、コリヤ一通ではムるまい。第一姫様のお身の上が氣づかはずい」

と云ひ乍ら、姫の居間の前に駈つけて見ると、琴の音はビタリと止んで居る。

秋山「亞様、御免」

と云ひ乍ら、隔の襖をガラリと引開け、覗き見れば豈計らんや、琴の主は藻脱けの殻、若しや便所ではあるまいか、捜し廻れども、姫の氣配もせぬ。春子姫を起して尋ねんか、春子の居間へ行つて見れば、之も亦藻脱けの殻……

秋山「コリヤ大變だ、然し乍らこんな失態を演じ乍ら、國司御夫婦に申上けることは出

来まい。前には若君を取逆し、今度又姫君を取逆したと云はれては、吾々兩人は皺つ腹を切つて申譯をするより道は無からう。幸まだ誰も知らぬ内だ。モリス殿貴殿と兩人がソット捜さうではムらぬか」

モリス「秋山別殿、如何にも左様、吾々の大責任でムれば、城内の人々に分らぬ内、餘り遠くは参りませぬ、搜索致しませう。表門は人の目に立つ、先づは裏門より」
と裏門指して急ぎ行く。裏門の戸は無雑作に開け放たれ、女の手巾が一つ落ちて居る。モリスは早くも手巾を拾ひ上げ、夜明前の月光に照して見れば、春の印がいつて居る……テッキリ之は表子が姫様と謀し合せ、逐電したに違ひない……と云ひ乍ら、兩人は裏門外の階段をトンク〜と下り乍ら、杖を力に轉げつ転びつ、馬場の木の茂みを指して追っかけ行く。

(大正一三・一・二四、舊二二・二二・一九、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第一九章 老

水 (一七六四)

秋山別、モリスの兩老は、先に高倉城の世子國愛別の脱出を氣附かざりし責任を負ひ、惜くてならぬ地位を表面上、責任を負うて辭任するに云つて、辭表を提出し、楓別命より……それには及ばぬ、今後は氣をつけて、國家に忠勤を勵めよ……この、優渥なる箴言を辱なうし、やつと胸を撫で下ろし、戀々たる元の地位に居据り、之で天下太平ミタカをく、つてゐた所、又もや妹君清香姫の思想が何となく異様に感ぜられたので心配でならず、過を再びせば、今度こそは切腹してでも申開きをせなならないと兩老は、夜半にも拘らず、姫の身邊に注意を拂つてゐた。にも拘らず、日夜に益をぬかれた様な驚きに會ふて、心も心ならず、こんなことを他の役人に悟られて

老 水

三二九

は、自分の地位が危い、幸ひ夜明けには少しく間があるのだから、今夜の内に姫の
所在を尋ね、ソッゴ城中へ迎へ入れておかんものと、杖を力に轉けつ輾びつ、裏門口
より馬場の木立を縫うて、ウントコドッコイ〜と蛙が跳たやうなスタイルで、息も
せき〜追つかけて行く。

秋山別は足拍子を取り乍ら歌ふ、

秋山別

「ハアハアウントコドッコイシヨ 高倉城の重臣と

世間の奴から敬はれ

最大權威を掌握し

大老の地位にすわりつ、

國愛別の若君に

スッバぬかれて、ドッコイシヨ 禿けた頭を臺なしに

めしやがれ鼻をねぢられて きうして大老の顔が立つ

是非がないので表向

進退伺辭職願

ソッゴワ〜出してみたら

仁慈無限の國司様

決してそれには及ばぬと

お下け下さつた嬉しさよ

ヤッゴ胸をば撫で下ろし

お務め大事と朝晩に

心を配り薬罐に

湯氣を立てつ、見守れば

しばしは無事に過ぎたれと

隙間を狙ふ魔の神が

又もや館に現はれて

大事の〜姫様を

甘言以て唆のかし

引ばり出したに違ない

まだ夜があけるに間もあれば

一生懸命御行方を

捜しあてずにおくものか オイ〜モリスしつかりせい

今日が命の瀬戸際だ

ウントコドッコイ、ハア〜〜

喉がひつつき息つまる

よい年してからこんな苦勞

なさねばならぬ二人の身

ホんに因果な生れつき

ウントコドッコイ〜シヨ

四方八方に氣をつけて

人間らしい影みれば

取つつかまつて查べあけ

否應いはさず連れ歸り

ソツと二人が脂をば

取つておかねば此後の

懲戒にならないドッコイシヨ

老眼鏡が曇り出し

一寸先も分らない

眼鏡をよれば尙見ぬ

進退こゝに谷まつた

ウントコドッコイ〜シヨ

アイタ、タッタ木の株に

足をつまずき脛むいた

ウン〜〜〜あ、痛や

腰の骨迄ギク〜と

下らぬ小言をいひ出した

アイタ、タッタアイタッタ

モリスは倒れてゐる秋山別を抱き起し、介抱しておつては姫の行方を見失ふ。それ
だど云つて、みす〜友迷をすて、行く譯にもゆかず、一間程前へ走つてみたり、後
へ戻つたり、幾度も進退をしてゐる。

秋山「オイ、モリス殿何をしてムる。第一線が破るれば、第二線が活動するは兵法の奥
義ではムらぬか。拙者に構はず、トットと出陣なされ。間髪を入れざる此場合、早
くお出でなされ。此秋山は殿となつて、そこらの木蔭や叢を捜しつゝ行くでム
らう、サア早く〜」

こせき立てられ、

モリス 「成る程、あこは貴殿にお任せ申す ウントコドッコイ〜シヨ

昔の罪がめぐり来て 又もや女で苦勞する

己れの態では無けれ共 悪い奴めが飛んで来て

こい〜〜〜と姫様を つれ出しやがつたに違ない

ウントコドッコイ〜シヨ グヅ〜〜してゐちや夜があける

早く所在を捜し出し 三つつかまへて元の鞘

をさめておかねば吾々の 大きな顔は丸潰れ

皺腹切らねばならうまい すまじきものは宮仕へ

ウントコドッコイ〜シヨ 躰の緒切つて八十年

これだけ辛い事あろか 秋山別の腰拔は

芝生に倒れてウン〜と 腰立たぬ淺ましさ

こは云ふもの、俺だこて 最早呼吸がつどかない

オ〜イ〜姫様よ オ〜イ〜春子姫

そこらに居るなら俺達の 心を推量した上で

あつさり姿を現はせよ オ〜イ〜お姫さん

決して叱りはせぬ程に 一號二號三號四號

五號(合)の寫眞氣にくはにや 一升でも二升でも捜します

オ〜イ〜お姫さん 雀百迄牡丹を

忘れぬためしもムります 何程頑固なモリスでも

戀には經驗持つてゐる 貴女の決して不利益な

話はせない村肝の 心を安んじ吾前に

あつさり現はれ下しやんせ 高倉城の大騒動

ヒルの國家の大問題 戀しき父と母上を

見捨て、出るには不孝ぞや 序に私も不幸ぞや

フコウ峠の麓迄 か、らぬ内に姫様を

さしてもこしても捉まへて 皺面立てねばおくものか

ウントコドッコイ、アイタ、俺も秋州の二の舞だ

木株につまづき向脛を 尖つた石ですりむいた

ウンくくくアイ、、、 アイタ、タッタ、アイタッタ

と云つたきり、其場に息も細つて、倒れて了つた。

春子姫は少し横側の灌木の茂みに、姫に追ひつき、息を休めてゐるが、此態を見て氣の毒がり、小聲で

春子「姫様、今倒れてゐるのはモリスぢやありませんか。あ、しておけば、絆れて了ひませう、介抱して助けてやりませうか」

清香「あ、助けてやらねばならず、助けてやれば妾の目的が立たず、さうしたら可からうかな。みすく老臣を見殺しにして迄、逃げ去る譯にもゆかず、困つた事が出来たものだ。春子、其方、そろくモリスの介抱をしてやつて下さい。餘り早く呼び生けるに、妾が逃げる間がないから、そこは時を計つて絆れない様に、そろく急いで助けてやつて下さい。其間に妾は逃げのびますからね」

春子「成る程よい御考へで亅います。私がモリス其他の役人が何程参りましても、一歩も之から南へ行かぬやうに、喰ひこめますから御安心なさいませ」

清香「何分頼みます、左様なら……」

と金剛杖を力に走り出した。夜はガラリと明けて小鳥の聲四方八方より聞わて来る。春子は、

「姫様、キツト後から参ります」

と聲をかけた。清香は二三回うなづき乍ら、密林の中に姿を隠した。春子はモリスの側に立寄りみれば、体をビコ／＼動かせ、幽かな息をしてゐる。忽ち水筒の水を口に含ませ、背を三つ四つ叩いて、三五の大神を念じ、「一二三四五六七八九十百千萬」と天の歡歌を奏上した。五分間程経た後、モリスは「ウーン」と一聲唸つて、頭を

ソツと擡げ、老眼を閉いて、

モリス「あ、秋山別か、能う助けてくれた。何分年がよつて、足が脆いものだから、此通りむごい目に會うたのだ。あ、目が眩む、まア暫く此處で息を休めねばなるまい。清香姫様は、こんな無謀な事はなざる筈はないが、侍女の春子の奴、彼奴が張本八だらう。オイ秋山、姫様に小言いふ譯にいかんから、以後の懲戒に、春子の奴を牢屋へでもブチ込んで辛い目をさしてやらねばなるまいぞ、ウン／＼／＼」

春子は之を聞くより、モリスの懐からタタルを取出し、目からかけて、頭をグツと縛り、モリスの命は大丈夫と、一生懸命に姫の後を尋ねて走り出した。

秋山別は足をチガ／＼させ乍ら瀕くにしてモリスの側迄やつて来た。

秋山「ヤア貴殿はモリス殿ではムらぬか。テも借も大怪我をなさつたぞみぬる。其鉢巻

は何でムる」

モリス 「此鉢巻は貴殿がさしてくれたものではムらぬか。一命すでに危き所、お助け下され、誠に感謝に堪へませぬ。持つべき者は同僚なりけりだ。お陰で足の痛みも餘程軽減致した」

秋山 「決して、拙者は貴殿を助けたのではない。漸うの事、此處迄辿りついた所でムる察する所、貴殿は何人かに救はれたのでムらう」

と、いひ乍ら鉢巻を外す。

モリス 「何だか柔かい手だと思つてをつた。そうするに、拙者を助けてくれたのは貴殿ではムらぬか。何はともあれ命拾ひをして結構でムる」

秋山 「斯う夜が明けて了へば、搜索の仕方もなし、大老ともあらう者が、供もつれず

に、ウロついて居つては却て疑ひの種、何にか善後策を講じようではムらぬか」

モリス 「左様でムる、職務上捨おく譯にはいかず、だに申して、斯う日の照るのに、吾々が姫の搜索もなりません。兎も角間道よりソツと吾家へ歸る事に致しませう。

秋山別殿、拙者と變り、貴殿は感慨無量でムらうのう。貴殿の御賢息、菊彦殿の掌中の玉を逃がしたも同様でムれば、御愁傷の程、察し申す。最早吾々兩人は之限り城中へ出入せない覺悟をきめれば可いではムらぬか。老先短い吾々、何時までも骨董品だ、床の置物だ、機械扱をされて、頭張つておつても詰り申さんでないか。吾々兩人が退職さへすれば、政治の方針は悪化するかも知れないが、マア兎も角人氣が一變してそれが却てお國の爲になるかも知れませぬぞ、秋山殿如何でムる」

山秋 「一度ならず、二度迄も大失敗を重ね、大老として、さうして之が國司に顔が合は

されうぞ。又衆生に對しても言ひ譯がムらぬ。貴殿のお言葉の通り、各自歸に歸り辭表を呈出致し、責任を明かにするでムらう。皺つ腹を切つて切腹すれば腹は痛し惜い命がなくなる道理、何程顯要の職務だといつても、命には替へられ申さぬ。アッハ、ハ、ハ、」

モリス「早速の御賛成、モリス満足でムる。然し乍ら斯う足が痛んでは、どうする事も出来申さぬ。一町許り後へ返せば、そこに谷水が流れてゐる。其水でも呑んで息をつぎ、ポツ／＼歸館致すでムらう。秋山殿、氣の毒乍ら、拙者の手を取つて下され。どうも苦しいてなり申さぬ」

秋山別「老いぬれば人の譏もしけくなりて足腰立たぬ今日の苦しさ」

モリス「身體はよし老ゆる共精靈は

いと美はしく若やぎ榮ゆ」

秋山別「脛腰も立たぬ身乍ら何を云ふ

清麗の水でも呑んで息せよ」

モリス「そらそうだ何程元氣に云ふたこて

争はれない年の阪路」

秋山別「海老腰に、なつてピン／＼はねたこて

買うてくれねば店曝しかな。

又しても清香の姫に逃げられて

二人はこゝに泡を吹くかな」

老 水

かく口ずさみ乍ら、漸くにして一町許り引返し、谷川から流れてくる清水の溜の側へこ着いた。

モリス「老の身の靈うるほす清水かな。

此清水おのが命を救ふらむ」

秋山別「われも亦清水むすばむ夏の朝。

汗となり力ともなる清水かな。

年寄りの鍬迄伸びる清水かな。

此の上は歸りて何も岩清水」

モリス「水臭い姫に逃げられ清水香む。

春子姫我を救ふて逃けて行く」

秋山別「サア早く家に歸らん二人連れ」

かく口ずさみ乍ら兩老は杖を力に城の馬場の間道から、力なげにトボ／＼と歸つて行く。

(大正一三・一・二五、舊二二・二・二〇、伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二十章 聲

援 (一七六五)

清香姫、春子姫は夜を日についで、高照山の山麓迄辿りついた。本街道を行くと、追手の虞があるので、本街道に添うた山林や野原を忍びノ、進んで行くので、比較的道に暇がこれる。谷川の涼しき木蔭に二人は腰打かけ息を休め迷懐を歌つてゐる。

清香姫「久方の天津御空を傳ひ行く 旭も清きヒルの國

高倉山の天津岩根に宮柱

太しく立て、三五の

皇大神を齋つ、

日出神の御教を

傳へくして世を救ふ

インカの流れ清くして

四方の民草男みつ、

恵の露に霑へる

其神國もいつしかに

黄泉國より荒び來る

醜の魔神に犯されて

拂ふすべなき暗の世の

ヒルの御國も夜の如

暗の帳に包まれて

黒白も分かね人心

あが足乳根の父母は

赤き心の紅葉彦

楓の別と次々に

赤き心を大前に

捧げまつりて仕へまし

世人を導き給へども

時世に暗き老臣が

心の暗は晴れやらす

ヒルの天地は日に月に

常夜の暗となりはて、

阿鼻叫喚の閻の聲

春野に咲ける花の香も

梢に囀る鳥の聲も

秋野にすたく虫の音も

皆亡國の氣配あり

此世此儘すこしなば

インカの國は忽ちに

修羅の巷に成果て、

わが衆生は根の國や

底の國なる苦みを

うけて亡ぶは目のあたり

時代に目覺めし兄の君は

われと語らひ逸早く

神の御爲國の爲

世人の爲に高倉の

堅磐常磐の堅城を

あゝに見捨て、天さかる

鄙に下りて身と魂を

練り鍛へつゝ、新しく

生れ來らん世の中の

柱とならむと雄建びし

神に誓約を奉り

出でさせ給ひし健氣よ

妾は元よりなよ竹の

力も弱き身なれども

御國を思ひ道思ふ

雄々しき心に變りなし

すき間の風も厭ひたる

床に飾りし姫百合の

假合奏る、世なりとも

赤き心の實を結ぶ

時を待ちつゝ、霜をふみ

慣れぬ旅路をやう／＼に

進み來りし嬉しさよ

あゝ、天地の大御神

妾兄妹兩人が

清けき赤き眞直なる

心を諾なひ給ひつゝ、

今日の首途をきこ迄も

意義あらしめよ幸あらしめよ

ヒルの御國の空打仰ぎ

高倉山に齋きたる

國魂神の御前に

空行く雲に吾心

のせて通ひつ願ぎ奉る

あ、惟神々々

御靈のふゆを願ぎまつる

あ、惟神々々

御靈の恩頼を願ぎまつる」

春子姫も亦歌ふ。

春子姫

「故里の空打仰ぎ思ふかな

わが大君はいかにますかこ。

ヒルの空打仰ぎつ、思ふかな

モリス 秋山別の身の上。

あの雲は灰色だ

そうしてヒルの空から

土つゝ来る

痛ましや

秋山別モリスの神柱の

青息吐息の

餘煙だらう

あ、痛ましや灰色の

雲に包まれて

ヒルの國の衆生は

さぞ苦しき霧圍氣の中に

世を啣ちて

惱んでゐるだらう

春の野の

百花千花も

牡丹の花の清香姫も

あの灰色の

雲を呑みて

こき紫の

雲の漂ふ珍の空へ

逃けて行く氣になつたのだから、あ、天津風時津風

南から北へ吹けよ、そうして

紫の雲をヒルの空に送れ

あの灰色の雲は

常世の國に吹散らせよ

國愛別の世子の君は

早くも珍に坐しますか

あの珍の空の雲の色のためでたさよ

高照山の空には

まだ灰色がかつた

淡い雲が往來してゐる

之を思へば

われ等二人の身の上は

まだハッキリと晴れて居ないだらう

あゝ味氣なき

浮世の雲よ

灰色の空よ

天も地も

山も河も

皆灰色に包まれた

今日の景色

國魂の神の

怒りに鬨れてや

四方に怪しき雲の龍世姫

恵ませ給へ

科戸の風を

起させ給へ

清めの風を

清香姫は又歌ふ。

清香姫「久方の天津御空を打仰ぎ

世の行先を歎くわれかな。

天も地も皆灰色に包まれて

世は常暗となりむとぞする。

いかにせば此灰雲の晴れぬらむ

わが言靈の力なければ。

時津風吹げよ大空に

われ等が上に

此霧圍氣の何時迄も

次第にくく亡びなむ

新進氣鋭の馬の聲

地震となり雷となり

之を思へば片時も

山に月をば樂しまんや

月は照れぬ

わが目には

又地の上に

陰鬱な

かからむ限り人草は

頭迷固陋の獅子の聲

北と南に響きつゝ

やがては割るゝヒルの國

身を安んじて高倉の

花は匂へぬ

鳥は唄へぬ

わが耳には

皆亡國の色と見えぬ

あゝ痛ましき今の世を

インカの御代に立直し

花咲き匂ふ天國の

あゝ惟神々々

木の芽もめぐむ春子姫

足を痛むる初旅を

國魂神の御前に

かよわき聲を張上げて

偏に祈り奉る」

地獄の聲と聞ゆ

清め澄まして古の

四民平等鳥唄ひ

ヒルの都を來たせたい

花のうてなの清香姫

踏みもならはぬ高砂の

恵ませ給へ天津神

谷の戸出づる鶯の

偏に祈り奉る

斯かる所へ覆面頭巾の山賊の群十數人、バラ／＼と現はれ來り、二人の姿を見て泥坊の親分らしき奴、巨眼を開き、二人を包圍し乍ら、長刀をズラリと引抜き、

親分「オイ、女つちよ、其方は何處の何者だ。一寸見た所、其方の容貌といひ、持物といひ、衣服といひ、普通の民家に生れた女ではあるまい。一伍一什、其方の素性を源九郎の前に白狀致せ。違背に及ば、此方にも覺悟があるぞ」

清香姫は始めて泥坊に出會つた恐ろしさに、顔の色迄かへて慄うてゐる。春子姫は姫の身を庇護ひ乍ら……假令泥坊の二十人や三十人押寄せ來り、兇器を持つて向ふとも、日頃鍛へた柔術の奥の手をあらはし、一人も残らず、谷川に投込み、懲らしめて呉れん……と覺悟をきはめ乍ら、そ知らぬ体にて、ワザとおとなしく、両手をつき、春子「ハイ、妾は高倉山を守護致す天人でムいます。大變な偉い權幕で、妾に何かお尋

ねの様にムいますが、人間は、假令泥坊にもせよ、禮儀といふものがムいませう。孱弱き女だと思召し、頭から威喝せうとは、チット男にも似合はぬ、御卑怯ではムいませぬか。何の御用か存じませぬが、天地を自由自在に致す天女でムいますれば誠のことならば、何でも聞いて上げませう、其代り道に外れたことならば、少しも許しませぬぞ」

とキツパリ言つてのけた。源九郎は度胸の据つた春子姫の言葉に稍ド膽を抜かれたが……タカが知れた女の二人、自分は十數人の命知らずの荒武者をつれてゐる。天人か天女か知らぬが、こんな女に尻込みしては、今後乾兒を扱ふ上に於て、信用を失墜する、飽迄も強敵的に出たのだから、無理押しで押さへつけてやらん……と覺悟をきはめ、ワザと威丈高になり、

源「アッハ、、、吐したりな、すべた女、天人とはまつかな詐り、吾々が恐ろしさの其場遁れのテレ隠し、左様なことに誑かられる源九郎さんぢやないぞ。高照山の山築に數百人の手下を引つれ、往來の男女を脅かす悪魔の源九郎たア俺のこことだ四の五の吐さず、衣類萬端脱いで渡すか、さもなくば、源九郎の女房になるか、サアさうだ。速に返答を承はらう」

春子「アッハ、、、悪魔の源九郎とやら、好い所へ現はれて来た。妾は其方の出現を待つてゐたのだ。邪魔臭い、木偶の坊を二十や三十連れて来た所で、齒ごたへがせぬ。乾兒を残らず引つれ、吾前に並べてみよ。片つばしから、窘めてくれん。悪魔退治に出陣の途中、悪魔の張本源九郎に會ふとは、何たる幸先のよい事だらう。一人二人は面倒だ。源九郎、サア一度にか、れ、天人の神力を現はして、汝が肝を冷しくれん」

源九郎は益々度胸がすわつて来た、清香姫は一生懸命、神の救ひを心中に祈つてゐる。春子「アッハ、、、悪魔の源九郎とやら、好い所へ現はれて来た。妾は其方の出現を待つてゐたのだ。邪魔臭い、木偶の坊を二十や三十連れて来た所で、齒ごたへがせぬ。乾兒を残らず引つれ、吾前に並べてみよ。片つばしから、窘めてくれん。悪魔退治に出陣の途中、悪魔の張本源九郎に會ふとは、何たる幸先のよい事だらう。一人二人は面倒だ。源九郎、サア一度にか、れ、天人の神力を現はして、汝が肝を冷しくれん」

源九郎は益々度胸がすわつて来た、清香姫は一生懸命、神の救ひを心中に祈つてゐる。春子「アッハ、、、悪魔の源九郎とやら、好い所へ現はれて来た。妾は其方の出現を待つてゐたのだ。邪魔臭い、木偶の坊を二十や三十連れて来た所で、齒ごたへがせぬ。乾兒を残らず引つれ、吾前に並べてみよ。片つばしから、窘めてくれん。悪魔退治に出陣の途中、悪魔の張本源九郎に會ふとは、何たる幸先のよい事だらう。一人二人は面倒だ。源九郎、サア一度にか、れ、天人の神力を現はして、汝が肝を冷しくれん」

春子「源九郎とやら、其方は大言を吐き乍ら、なぜ辱弱き二人の女に手出しをせぬのか

吾々の威勢に恐れてゐるのか、返答せいで、妾は天下を救ふ宣傳使だ。汝如きに怖れを抱いて、さうして天人の職が勤まらうぞ。卑怯未練な男だなア」

源「ナアニ、タカが女の一人や二人、片腕にも足らねども、可惜名花を散らすは惜しいものだ。それ故暫時、根株を切つた鉢植の花だと思つて眺めてゐるのだ。やがて果敢ない終りを告げるだらうと思へば、聊か同情の涙にくれぬ事もないわい。テモ扱も見れば見る程、美しい……イヤいぢらしい者だワイ」

春子「エ、汚らばしい、泥坊の分際にして、天人に向ひ、いぢらしいとか、美しいとか、チツと過言であらうぞ。要らざる縁言申すよりも旗をまき尾をふつて、此場を早く立去れ、エ、汚らばしい、シブ〜」

と猫でも透ふ様な大膽不敵の舉動に、源九郎は怒り心頭に達し、

源「要らざる殺生はしたくなけれ共、モウ斯うなれば後は退かれぬ男の意地、コリ、女、今に吠面かわかしてみせる、覺悟をいたせ……ヤア〜乾兒共、兩人に向つて斬り付けよ」

と下知すれば、心得たりと、十數人の乾兒は二人の女に向つて、阿修羅王の如くに迫り来る。春子姫は一方の手で、清香姫を庇ひ乍ら、力限りに防ぎ戦へども、剛力無双の敵の襲撃、早くも力盡きて、彼が毒牙にかゝらんとする危機一髪の場合となつて来た。源九郎は岩上に腰打かけ、平然として煙草を燻らし乍ら、此光景を見下ろしてゐる。清香姫は今や捉へられんとする一刹那、あたりの空気を振動させて宣傳歌が聞かされて来た。あ、此結果は何うなるであらうか。

(大正一三・一・二五、舊一二・二・二〇、伊豫 於山口氏邸、松村眞澄録)

第二章 貴

遇 (一七六六)

「桃上彦の昔より

萬古不易の國体を

保ら來りし珍の國

神の恵もアルゼンチンの

高砂城の國司の悴

われは國照別司

此世の暗を晴らさんこ

雲霧分けて天さかる

市井の巷に身をやつし

下人草の窮狀を

窺ひすまし新しき

五六七の御代の柱をば

堅磐常磐に立てんとて

生れついたる仁侠の

引くに退かれぬ男伊達

故郷の空を後にして

踏みもならはぬ旅の空

心を研き肝をねり

醜の大蛇も曲神も

地震 雷火の雨も

いつかな恐れぬ魂となり

天と地に蟠まる

入岐大蛇や醜狐

其外白の曲鬼を

言靈劍抜きもちて

言向和し天國の

御園を開く吾望

守らせ給へ惟神

神に仕へし我父は

既に年老い給へきも

新進氣鋭の魂を

深く秘して忍びます

其御心を思ひやり

子としていかで悠々こ

遊惰に日をば送らんや

思ひ切つたる今日の旅

日出神の現はれて

開き給ひしヒルの國

ヒルの都に身を隠し

南と北と相應じ

此高砂の天地をば

昔の神代にねぢ直し

神人和合の樂園に

進ませ給へ惟神

龍世の姫の御前に

誠み敬ひ願ぎまつる

旭は照るとも曇るとも

月落ち星は失するとも

神の守りのある限り

いかで恐れん敷島の

大和男子の魂は

金鐵よりも尙堅し

勇めよ勇め乾兒共

進めや進めヒルの國

高照山は峻しとも

吹來る嵐は強くとも

道の行方は遠くとも

いかで怯まん男伊達

男の中の男よこ

世に謳はれて世を救ふ

之ぞ吾等の望なり

之ぞ吾等の願なり

あ、惟神 々々

御靈幸はひましますよ」

國照別の國州始め駒治、市、馬、淺の一行五人は捻鉢巻をし乍ら、眞黒の腕をヌット出し、埃まぶれの毛だらけの脛を引摺り乍ら、此處までやつて來た。見れば怪しき人の喚き聲、唯事ならじと近寄り見れば、孱弱き二人の女を相手に大の男が詰めかけて居る。國州は男を賣るは今此時と、赤裸の禪一つとなり、喧嘩の中に矢庭に飛込み、大音聲にて、

國「待つたく、此喧嘩、俺が預かつた」

「大の字になつて、立ちほだかれば、此聲に何れも二三間許り後へ退いて息を休めて居る。源九郎は冷やかに之を眺めて、

源「オイ、さこの唐變木か知らねいが、俺達の喧嘩に這入つた以上は、みんな事、埒をあけるだらうのう。なまじひ挨拶なら、やらねわが良いぞ、みんな事、甲斐性があるか」

國「アッハ、、、、警碌共、確かり聞け、其方等は旅人を掠むる惡逆無道の泥坊ぢやねわか、俺はかつ見ても天下の俠客だ、義の爲には命を借まねわ、お兄さんだ。泥坊が旅人を掠めてる所へ入込んで来たのは仲裁ではねわぞ、懲しめの爲にやつて来たのだ。さうだ、其方を始め一同の奴、改心を致して眞人間になるか、返答聞かう」

源「ワッハ、、、、蟻螂の空威張奴、そんなおとし文句で驚く様な源九郎ぢやねわぞ俺達は人を裸にして、財物を盗れば可いのだ。それを否む奴は、氣の毒乍ら命を取つても目的を達するのだ。其方もいらざる空威張を致すより、赤裸のまま、トットと歸れ。いらざるチョッカイを出すこ、氣の毒乍ら命がねわぞ」

國「ハッハ、、、、盗人猛々しいこはよく云つたものだ、取れるな、取つて見よ」
源九郎は髪を逆立て乍ら、

源「オイ乾兒共、何を躊躇して居る。タカが俠客の四八や五人、ばらして了へ」
と下知すれば、又もや十數人の小盗人は四方八方より切つてかゝる。清香姫、春子姫は之に力を得、前後左右に敵を潜つて、切立て難立てる。瞬く間に、十數人の奴は鼻を削がれ、腕をかすられ、足を突かれ、ホウ／＼の体で算を亂して逃出す。源九郎も此体

を見て、大人氣なくも、高照山の山頂目懸じ刀を打振り乍ら、殿を守り、味方を渡へて逃けて行く。國州は追ひかけるも無用と、谷川の水を手には擲ふて喉を潤し、身づくろひをし乍ら、

國「オイ駒、如何だつた、チット泡吹いたらうな」

駒「俠客の喧嘩なら喧嘩の仕應へもありませんが、何を云つても一方が泥坊だから險呑でなりませんワ。マア〜御蔭で吾々一同には怪我が無くて結構でした」

國「泥坊だつて、俠客だつて、喧嘩に變りは無い。併し乍らお前達も、此處でゆつくり一服するが可い。此姫様は如何して又あんな者と喧嘩をなさつたらうかな」

と云ひ乍ら、清香姫の側に寄り、

國「エー姫様、危ねねこつてムねやした。先づ御怪我が無くて、お芽出度うムいやす

わつちや、國州と云つて、珍の國の者、ヒルの國へ行く途中、計らずも泥坊に出會し、一つ目覺しをやつて見ましたが、イヤ早もろい者でムねやした。アッハ、、、」

清香「ハイ有難うムいます、危い所へお出下さいまして、こんな嬉しいことはムいませぬ。貴方は今、珍の國の國州と云ふ俠客だ。仰有いましたが、そんなら貴方は妾の尋ねるお方、國照別さんちやムいませぬか」

淺公は側より、

淺「左様々々、今こそ俠客になつてムるけれど、珍の都の御世繼國照別様でムいますよ。用も無いのにヒルの都へ行かうと仰有るので、乾兒の悲しさ已を得ず従いて來ましたが……へ、、、こんな別嬪さんがムるので、親分さんも御越しになつたのだなイヤ分りました、親分さん、一杯買うて貰はにやなりませんぞ」

國「エ、仕方の無い男だなア。之だから口の軽い奴ア、困ると云ふのだ。チット控わて居らう」

淺「何ミママ親分の愉快相な顔、そらそうだらう。乾兒の私だつて、愉快で堪らないもの……若し姫さん喜びなさい。貴女が遙々慕ふて怖い目をして、尋ねて来た三國一の婿さんは、へエー、此親方でムいますよ。何をグツ／＼してゐる、耻かしい事も何もない、及ばず乍ら此淺公が月下氷人となつて握手をさせませう。何と悪うはムいますまいがな」

清香「妾は餘りの驚き 何も申上げる事は出来ませぬ。春子姫、お前代つて、あの國さんにお話をして下さいな」

春子「これは／＼危い所、お助け下さいまして、厚く御禮を申し上げます。貴方が噂に聞き及ぶ高き珍の國の國照別様でムいますか、存せぬ事にて御無禮を致しました。姫様の仰せに従ひ妾が代つて御話を申上げ度うムいますが、姫様はお兄様と謀し合せ、國家の窮狀を救はんとして、色々と畫策を遊ばされ、今又お兄様の密使に依つて……珍の國の國州さんと云ふ俠客にお前を娶合してやらう、そうすればヒルの國を救ふ事が出来る……と御通知がムいましたので、取る物も取敢ず此處迄參つたのでムいます果して貴方が國照別様ならば、こんな好都合はムいませぬ。之からヒルの國へお伴をして歸り度うムいます。さうぞ此儀御開届を願ひます」

國「ウン、貴女が國愛別様のお妹御でムつたか。兼々兄上より貴女の思想も御器量も承はつて居りました。實の所は此國照別もヒルの都を指して来たのは、貴女に會ひ度くもあり、又一つ珍の國は國愛別様に御願ひ申して改良して頂き、其代りど

して拙者がヒルの國を根本的に改革せん、俠客となつて浮世を忍び下層生活をし乍ら、回天動地の大業を爲さん、此處迄やつて参りました。之は願ふても無き互の奇遇、然らば之より姫様の御伴を致し、ヒルの城下へ参りませう」

之より一行男女七人は堂々として、大道の正中を宣傳歌を唄ひ乍ら、ヒルの都を指して進み行く。淺公は先に立つて、道々宣傳歌を唄ふ。

淺公 「テルミカルミの國」

高照山の山麓に

高砂島で名も高い

大親分の國さん

あたりを拂ひ堂々

地踏みならし進み來る

時しもあれや谷川の

傍邊に怪しき人の聲

何事ならん近寄れば

豈計らんや雲をつく

ばかりの大きな泥坊が

長い奴をば引抜いて

二人の姫をまん中に

前後左右から切りつける

此奴ア救はにやなるまいと

親分さんが赤裸

喧嘩の中に跳り入り

待つた〜四股踏めば

さすが泥さん肝つぶし

二足三足後しざり

蜥蜴が欠伸をした様に

空を仰いで呆れ顔

親分さんの掛合で

木つ葉泥坊は悉く

大切の〜仕事をば

可惜棒に振り乍ら

手紙を負ふて逃げて行く

後に國照別さんは

ヒルの國からやつて來た

天女のやうな姫様と

二世の約束堅めつ、
 そんならお前の云ふ通り
 行つてやらうと嬉し氣に
 側に見てゐる俺さへも
 オイ／＼駒治、市、馬よ
 現在泥坊を目の前に
 コラッ／＼一聲かけもせず
 こんな取締が世の中に
 枕を高く寝られない
 親分さんの御光りで

吾等乾兒を引伴れて
 之からヒルの都路へ
 云はれた時の姫の顔
 何だか嬉しうなつて来た
 お前は元は取締
 眺め乍らに何のザマ
 青い面して慄ふて居た
 あると思へば衆生も
 何奴も此奴も腰拔だ
 こゝまで御伴はしたもので

若しも一人になつたなら
 腕の一本も振ぎ取られ
 あゝ惟神々々
 矢張り肝が太いワイ
 親分さんの一の枝
 ウントコドッコイ／＼シヨ
 並木の街道を進み行く
 勝利の都へ行くやうな
 谷の流れは溶々
 我一行を歓迎し

キツト泥坊にこみわられ
 ベソをかいたに違ひない
 之を思へば淺公は
 サア之からは淺公が
 お前は乾兒になるがよい
 天を封じた老木の
 吾等一行は何と無く
 涼しい氣分になつて来た
 飛沫の玉を飾りつ、
 琴を弾じて待つて居る

峰の嵐は松柏の

梢を吹いて吾々を

謳歌して居る勇ましき

ウントコドッコイ〜シヨ

今は侠客渡世だが

親分さんがたつた今

ヒルの都に現はれて

清香の姫の婿になり

國の政治を執られたら

必ず抜擢遊ばして

使ふて下さるだる程に

駒公市公馬公よ

それをば先の樂みこ

思つて俺に従いて來い

前途はいよく有望だ

思へば〜身も魂も

勇みに勇み跳り出す

何程坂はきつくとも

何程日かけは暑くとも

前途に望みを抱へたる

吾等一行の魂は

火にも焼けない又水に

溺る、事なき大丈夫

大和男子の典型と

末代迄も名を揚げて

國の柱となるだらう

あ、勇ましや〜

全隊進めいざ進め

勝利の都が近づいた

勝利の都はヒルの國

あ、惟神々々

國魂神の御前に

吾等が前途の幸福を

守らせ給へ〜願ぎ奉る」

斯く代る〜行進歌を唄ひ乍ら、十數日を経た黄昏頃ヒルの都の町末の或る茅屋に着いた。

(大正一三・一・二日、舊二二・二・二〇、伊豫 於山口氏邸 松村眞澄録)

第二二章 有

終 (一七六七)

國照別一行はヒルの都の町外れの半倒れた古家を借つて住込み、博奕をやめ、自分は青物を担うて町中を賣り歩き、乾兒は畠を作つて野菜の栽培をやつてゐた。そして清香姫は裁縫炊事等に全力を盡してゐた。春子姫は淺、市馬、駒泊などの乾兒を率ゐて、毎日野良へ出で耕作に従事してゐたが、誰も其素性を知るものはなかつた。然るに一年許り経つて、ふとした事から清香姫、春子姫が此町外れの茅屋に賤の女となつて、四五人の男と共に耕作に従事してゐる事が、其筋の耳に入り、秋山別、モリスは職に居る譯にも行かず一切地位も名望も抛ちて、老嫗を提げ、耕耘に従事した。そして清香姫に自分の至誠を現はして再び城中に歸つて貰ふ事にした。清香姫は國照

別と共に城中へ歸り、父極別命及母の清子姫に對して、自分等兄妹の意中を露程も包まず吐露した。兩親も吾子の至誠に感じ、自分は退隱して、高倉山の宮に専任し、清香姫、國照別の意見に従つて、國內に仁恵を行ひ、且つ衆生の意を迎へて、徳政を施し、貧富其の處を得せしめ、上下の障壁を除き、老若男女一般に選舉權を與へた。茲に於てすでに擾亂勃發し、國家崩壞せんとする危機一髮のヒルの天地は、忽ち黎明の新空氣に充ち地上に天國を實現する事となつた。そして國政を改めて、インカ國の制度を改善し萬代不易の礎を固め、國照別は選まれて大王となり、ヒルの國家は永遠無窮に、旭の豊榮昇りに榮ゆる事となつた。實に名にし負ふ高砂島の聖場、高倉山は永久に平和の花香り、鸞鳳空に飛び、迦陵頻迦は春夏秋冬の別なく、御代の隆盛を謳ひ、神人和樂して、國內一點の不平も不満もなく至治太平の瑞祥を味はふ事となつた。